

くものとして、それ等の人々に説明するなら、ラヂオとは無線で、家庭その他に備へ付けられてある機械に感應して、著音機以上に明白なハッキリした音聲を聴かせるのだ。それでは何處から音楽だの聲樂だの長唄だの三味線だのを放送するかと云ふと、放送局と云ふ所があつて其處で遣つて呉れるのだ。だから要するに家庭に備へ付ける機械を買つて、放送の申込みさへすれば、それでいゝのだ。若し長唄を嫌ひであつたら、その時一寸機械を加減すれば聴かないでも済むことになる。云はゞ勝手に出来る譯である。名士の演説も聴ける。日本來遊の名曲家の美しい音も聴ける。居ながらにして演説會や帝劇へ行つてゐると同じいのである。或は爽快極まりなき陸海軍の軍樂をも楽しむことが出来ると云ふ譯だ。もう解りましたか。

二階へ上がると、恰度或る女性聲樂家の玉を轉ばすが如き妙音が放送されてゐる眞最中であつた。愈々これは買はなくちやならぬと、私は臍を堅めたけど、本當に買ふことは暫らく熟考を必要とした。



熟考の必要茲に一ヶ月、まだ買はないでゐる。

## 金なき戀

或る男に或る女が戀をした。男も女を愛した。二人は總てを許した。斯くて三年曠きが續いた。それが女の家を知れた。思ひ切れと責めた。思ひ切ると女は答へた。然し何うしても思ひ切れなかつた。監視の目を窺んで男の所へ逃て來たいと訴へて來た。「私をいくら探しても解らない所へ隠して下さるか、或は遠い／＼外國へでも連れて行つて頂戴」とも書いてあつた。何うすればいゝかと男は私に打ち明けて相談に來た。男には妻子があつた。私は男に君は金を澤山持つてゐるかといふ。持つてゐないと答へた。そして金さへあれば私は其の女と二人で暮らして行くんですがと、淋しい顔をした。女は愛さへあれば金なんか無くともいゝと考へてゐるけど、僕は流石は世の

中を知つてゐますからと、男は云ふた。

女は捨てたくなし、さりとして先方の申分も納れられずと男は困り切つて訴へた。全く右に動くにも左に動くにも金であつた。今の世の中は金あつての戀である。金なき戀は永續するものではない。早い話が二人で牛鍋をツ、クのも金である。江の島鎌倉へ散歩するのも金である。金がなかつたら、いつも野原をお腹ペコ／＼散歩しなくちやならぬ。それぢや永續しない。田舎ではそれでいゝかも知れぬが、都會では駄目である。

女は金が眼中にないから一生懸命である。つまり二人一緒にさへりや、どうにかなるものと思ふて居る。それがどうにもならないから困ると男には理智が閃めいてゐた。男には妻子がある、妻子を捨て、其の女と一緒にゐるには妻子の安全を計つてやつた後でなくてはならない。つまり金だ、その金が無い爲に愛するもの同士は一緒になれないことになる。

妻子の安全なんか何うでもいと云ふものがあつたらそりや無茶だ、男には人情があつた。

今更嫁に行かれないと云ふ女にも理があつた。彼女は尊き戀愛の前には總てを捧げてゐたのである。今や女は一步も出られない程嚴重にされてゐる。二人は會ふことが出来ない。手紙の往復も出来ない。時はどんな解決を與へるだらう。時だ、時だ、私は「時の来るまで其の儘にしておいたら」と答へた。男は不満相にして歸つたが、實際それ以上答へる業がなかつた。

## 金が戀人

オヤツ！ 彼女が知ら、彼女としては餘りに見寒らしい。然し矢つ張り彼女だ。二人は近付いた。

「水登子さんぢやありませんか。」私は聲をかけた。

「？」彼女はハツとしたらしかつた。顔がサツと赤らみを流した。それは此處姿を相手の眼に觸れしめた羞らひの赤面であつた。

「どちらへ？」

「新宿の方へ参りたいんですが、道を迷ふてしまつたんです。どう行けばいゝんでせう？」

恰度私は新宿へ出掛け様としてゐたので、それでは御案内ませう、と細い小徑に折れた。

「三年間も會ひませんでしたねえ。」

「え、ほんとに暫らくでした。」小さい聲で女は答へながら又自分の變り果てた姿の上へ眸を落した。

今から三年前である。彼女は友人の紹介で私に會ひに來た。自分の書いた小説を何

かの雑誌に載せる筆力をして下さいと云ふことであつた。どうしても自分は創作で生きて行くより外はないんですからと可成元氣であつた。

私は其の小説を読んで見た。少つとも惹き付ける力や、又今後これで立つて行ける力強いものを見出せなかつた。然し折角あゝ云ふのだからと、私は某雑誌の主幹で仲のよい友人がゐるから、それに紹介状を書いて、これを持って頼みに行つて御覽なさいと云ふた。その紹介状には出来るなる本人に向上心を起さす爲めに載せて勵まして遣つて呉れまいかと、可成私は依頼して遣つたものである。その後友人から折角だつたけどあれぢや拙過ぎると云ふて來た。女からも原稿は返されましたと悲觀して來た。それから又女は書いた寄越した。それも採用さるゝ所とはならなかつた。男と違つて女は何を書いて少しモノになつて居れば、直ぐ名を出せるに係はらず、彼女の才能は其處まで及ばなかつた。彼女は私には力がないんでせうかと訴へて見たりもした。私は慰めるに何う云つていゝか解らなかつた。



いつしか彼女は来なくなつた。その後最初彼女を私に紹介した男に詳しく彼女の身の上について聴かされた。

故郷の女學校を卒業してから間もなく、彼女は或る男と熱烈な戀におちた。両親は此の結婚は承知しなかつた。お前が強い彼の男と同棲を望むなら、お前の分として別ち與へる財産を遣ることが出来ない。あの賄甲斐ない男の何處が氣に入つたのかと訊いた。二人は互に雑誌に寄書して知合になり、戀になつたのである。二人はお定まりの如く私共には名譽も財産も要らない。この愛見よやと許り互に手を執つて東京へ逃げて來た。所が早速二人は喰つて行く用意にかゝらねばならなかつた。そこで男は何かの雑誌の手傳ひをし、女は一人の子を抱えながら、パンの資の爲めに筆を執らねばならなかつた。某市第一の財産家の令嬢としては餘りに急轉した生活であつた。

然し彼等の愛の力はひるまなかつた。依然として両親に抗して世の荒波と戰つた。荒波と戰つたと云へば勇ましい様だけど、二人は幾度び血の涙を絞つたことか。

「どうです、近頃の御生活は？」私は訊いた。

「碌に御飯も満足に喰べられないみじめさです。子供も二人になりました。良人は職を失ひました。矢つ張り愛よりも富でした。眞の貧苦の前に、戀だの愛だのと騒いでゐられませうか。何と云ふ貧乏と云ふものは苦しいものでせう。私は近頃始めて両親の有難さに涙を零してゐます。若さの勢ひと熱の爲めに何物をも恐れなかつた私は、世の中へ出て始めて、人間苦と云ふものを知りました。戀や愛は裕かな生活者の餘技に過ぎないのです。もう何も之れ以上聴いて下さいませ。私は倒れ相です。今朝はまだ御飯も喰べないで斯うして出てゐるんです。子供の乳も出ない程、私の身體は衰へ切つてゐます。」

「でも目下どうして働いてゐるんですか。」

「良人は家で子守をしてゐます。私は或る劇場の切符販賣を頼まれてゐるんです。そして其の賣つた中から、僅かの歩合を貰つて其れで生活をしてゐるんです。申上げる

のも恥かしい僅かの金です。全てコンデンスミルクを子供に買ひ與へる丈け見たいなものです。』

『それで、よく生活が續けられて行きますね。』

『え、自分ながら不思議だと思ふてゐます。生きて行くことは、どんなにドン底にあつても、うごめいても生きて行けるものですね。』

『本當にお困りでしたら、私が幾分でも。』

『いゝえ、もう貧乏には馴れ切つて了ひました。平氣になりました。』斯う強く云つたものゝ直ぐ聲を悲しみに沈ませて、『社會は金が戀人ですわねえ。』これ丈けを唇から洩らして、後は全て屠牛の如く、無理に私と歩調を合はせてゐるに過ぎなかつた。戀愛の敗殘の影は何と云ふ淡いものであらう。

## 鎌倉の娘は歸る

鎌倉の娘は歸る、鎌倉の娘は歸る、何と云ふ嬉しいことであらう。私は早く見たかつたのだ。私は早く會ひたかつたのだ。未知の者への美しき憧憬。

朝日姉妹は其の間の娘、光惠さんの歸京をどんなに待つてゐたかも知れなかつた。光惠さんは兎角健康優れないが爲めに鎌倉の某家に靜かに養生してゐた。二人には此の娘の居ないことが、寂しい思ひをせしめた。光惠さんがゐたらと云ふことは、お互はよく口にも出し、心にも想はせた。私は其の光惠さんの寫眞を或日見せられた。全で神々の天下りせる如き美しい人であつた。

『ねえ、綺麗でせう、姉妹三人の中で、光惠さんが群を抜いてゐると思はない？』  
『成程こりや。私は暫らく見詰めた。』

「美しいでせう。」姉は返事を頷がした。

「私は今まで嘗て此處美人を見たことがない、如何にも品のいい、如何にも優しい、又如何にも温良かな。……一寸お二人共私に顔を見せて下さい。ウム矢つ張り此の光惠さんは一番だ。」

「私し達、ちつとも恨まないわ。この姉妹が左様思ふてる位ですから、他人が見たら何處にお賞めなさるか位は解つてゐるんですから。優しい氣質の光惠姉さまよ。」

妹の美登子さんの姉思ひは此の言葉の中に充分うかゞはれた。

「そりや佳い人。ね。」姉も負けなかつた。

そんな會話を聽いてゐた私は堪らなく此の家庭のうるはしさが、まさしくと浮べられた。母人の教養が然らしめたのであらう。私は斯うした場面を見せられると、第一に其の母の賢しさを思ふ。

姉妹は近い裡に光惠さんが歸つて来る、嬉しいわねえと心からの微笑みに、さどめ



いてゐた。

「ねえ、又屹度らして下さいね。早く光惠さんに會つて欲しいのよ。光惠さんも執  
瘻に嬉しがることせう。」

別れて来る時、二人は左様云ふた。

それから三週間も経つた後、私は此の美しい姉妹のお母様が胃病で困つてゐると云  
ふことを此の前聽かされたので、胃病に實によく效く薬を持つて訪ねて行つた。お母  
様は病床にあつた。非常に喜んで病める顔の上にも、笑みが溢れた。

「どうも感冒を引いたらしいんですよ。もう大丈夫、明日あたりから起きられるかも  
知れない。本當に弱いので困つて了ひました。」

お母さんは可成の疲れを見せてゐるけれど、其の眼ざしは恰惻に輝いてゐた。

恰度御飯を喰べてゐた妹は直ぐ入つて来た。

「ね、他見男さん、光惠さんが歸つて来たのよ。今、直ぐ茲へ出てきてよ。」

それから二ツ三ツ話合つてゐる所へ、姉さんが髪を洗つた許りだと見えて、長く垂れ  
ながら入つて来た。次に泰西名畫の様な顔が現れた。これぞ光惠さんである。

「私の大事の妹よ。」姉さんは紹介した。光惠さんは淑やかに手を疊についた。私も腰  
を屈めた。

「私は病人だから、彼方へ行つてお遊び。」

お母様の斯う云ふ言葉を耳にすると、「ちや御座敷へ行きませう、御座敷へ」と、皆  
は一時に立上つた。そして紫檀の机を圍んで坐つた。

「可愛い妹でせう？」

「まアお姉様。」光惠さんは白い齒を見せた。

「随分聽かされてゐたのよ。世にも類なき美人あり、名を光惠子と云ふなど。」

「あら、そんな事を云ふたのは美登子さんでせう？」

「いゝえ。」すまアしたお顔。



「寫眞を見せて貰つてゐたんですよ、椅子に腰かけて、手を斯う云ふ具合にした。」

「あれ？　あれは好過ぎるのよ。失望したでせう眼のあたり見て。」

「いえ、失望しない證據には先刻から嬉し相にニコ／＼貴女の顔を見てゐるぢやない？　偽はらざる至誠が面に現はれてゐるんです。貴女がああ静かな海邊に佇んでゐる時、由比ヶ濱は孰麼に美しい畫を見せて呉れたでせう。朝の貴女の姿は神の如く陽に輝いたでせうねえ。夕べの貴女の姿は下りませる天使を思はせたでせうねえ。書見の姿、街ゆく姿、どんなに多くの人々の視線を喜ばせたか。」

「さ、光惠さんお奢なさいよ。」

「本當よ、お奢なさいよ。」

姉妹は口々に云ふた。光惠さんは幸福そのものゝ中に包まれてあつた。姉がピアノ臺に坐ると、妹は歌つた。妹が坐ると、姉が立つた。楽しい音楽、喜びの聲。

「鎌倉の娘は歸る」は孰麼に此の家庭を、歡喜に驅はせたか。あゝ鎌倉の娘は歸る。

## 或る日のカフェーライオン

大津さんが今夜の七時廿分の急行で、東京驛を出發すると云ふので、その見送りに私は家を出た。電車が神保町で止まつた時、私はフィと或る本を買ひたいナと閃めいた。同時に飛び下りた。二三軒大きな書店を覗いて、その希望を達したので、又乗つた。東京驛へ来て上を見たら、七時四十分だつた。廿分の遅刻だつた。外の遅刻と違つて汽車の遅刻は仰ぎ見る月を見るより悲しい。

「困つたナ」と、暫らく私は時計を睨んでゐた。何故自分が現に此のポケットに時計を持つてゐながら、それを見なかつたのか知ら。何故私は神保町などで下りたのか知ら。その本は直ぐにも買はなくてはならぬと云ふ程急ぐもので無かつたのに、などゝ後悔して見た。

次に私は『何うしやう』と思ふた。この淋しさと焦慮とは黙々として歩いてゐる裡に自然に消えるであらう。消えなくても薄らぐであらう。そう思ふた私はブラ／＼と京橋の方へ足を動かして行つた。略半町ほど来た時に、フイと三浦大分市長が東京ステーションに泊まつてゐることに気が附いた。『居るか知ら』一寸逡巡した。『兎に角行つて見よう、居なくてもツイ其處なんだから』

斯う思ふて私は急に又廻れ右した。

三浦市長には別府の宴席であつた。非常な快活な人であつた。後で或人が全国の市長の中でも三浦市長は有数の遣り手で、あれ程自分の所信を、キツパリ云ひ切る人がないと聽かされて、益々私は其の勇らしさにボツと來た。

三浦市長も私に豫ねてから會ひたかつたと其の席で云ふた。大變お互は意志が疎通した。その市長が上京してゐると云ふことは誰から聽くともなく聽いてゐた。今それを氣附いたのだ。



ホテルの受付へ来て、三浦さんがゐますかと訊くと、執方の三浦さんですかときた。三浦さんが二人泊つてゐると見える。市長の三浦さんだと云ふと、それでは四十七號室だと教へる。即ちエレベータ、即ち扉を叩く。

「オウ」と應ずる聲がしたので、「居るナ、めめたぞ」と許り、サツと開く。

「三浦さん、この顔に覚えがありますか」と、ヌツと突き出して見せると、

「有るとも、有るとも、天下の好男子奥野他見男君ぢやないか。」

諧謔一番して哄笑した。

「よく居ましたね。」

「よく訪ねて来て呉れたね。」

「大津さんを見送りに来た所、汽車が出て了つたんですよ。」

「ウン、僕も見送り害ねて、斯うしてボカンとしてゐるんだよ。」

「全国市長會議で上京したんですか。」

「いゝや、外の公用で。今しがたまで息子が来て居たんだよ。」

「あの帝大の英文科へ行つてゐる？」

「ウン、いつか君と會つたね。」

「あれつ限りですか、子供さんは。」

「いゝや、まだ京都大學へ一人行つてゐるよ。その男は風變りも風變り、言語學と云ふものを遣つてゐるんだ。」

「お嬢さんも有りましたね？」

「君は頭がいゝねえ。ウンあれか、あれはもうお嫁入りしたよ。」

「貴方のお見立てなら、しつかりした人物を選んだでせうなア。」

「ウン、そりや確つかりしてゐる。第一娘をよく可愛がつて呉れる。」

「余は満足ぢやと貴方は云ふたでせうなア。」

「ウワハツ、全く其の通り。己れも内外多望ぢやわい。」

三浦さんは又愉快な笑をした。それから別府の山田市會議長あんな篤實謹嚴な人は方今珍しいだの、子分や市の爲めには萬金を惜しまない親分肌であることだの、神澤市長には皆敬服してゐるだの、武田綾太郎君は奇策縦横の才子で、別府には人材の多いことを語り聽かせた。三浦さんの感心なのは決して他人を悪く云はないで、どの人をも推賞する點であつた。あすこが私の主義とも一致してゐるから、氣がセイゼイするのだ。

私はよく他人に話すのだが、たとへ執麼ことがあつても人を悪し様に云ふてはならない。それは必ず一度は先方の男へ傳はつて了ふものだ。ウンあいつ己れのことを悪く云ふてゐるたか、あいつだつてと今度は自分の悪口がドシ／＼並べ立てられる。それほどばかりか雙方の感情が夥しく變なものになる。

又、斯う考へても宜しい。それは他人の悪口を云ふ程、自分に缺點がないか何うか第一に自分を省みるがいよ。あらだらけであるぢやないか。その自分のあらを棚へ上

けて他人を云爲するのは小人の業である。

私はだから決して他人のことを悪く云はない、人のことを悪く云ふ輩は成功しないと考へてゐる。云ふなら何日でも私は其の人の面前で遣る。腹立てぬ様にして面前で斯様しか／＼であるぞと述べる。その癖影へ廻はつて其の人のことを大に賞める。後で先方は聽く、あゝ感心な男ぢやなアとなる。處世術の秘訣は此の呼吸である。

三浦さんと私は散歩に銀座へ出た。三浦さんは「酒、一度び來たらば一度び飲まん、再び來たらば再び飲まん、三度來たらば三度飲まん」と云ふ程の酒豪だからと氣が附いて、私はライオンに案内した。そこでコックテールの素晴らしいのを「どうです？」と勧めた。三浦さんは其れを口にして「ウム、このコックテールは旨い、胸の中でパプロワ夫人が舞踏してゐる様な心持ちだ」と比喩が巧妙だ。五十臺の人とは思はれぬ進んだ頭腦の持主だ。

三浦さんは四邊をグル／＼見廻はして、

「若い者が多いねえ。己れの息子など、己れの前に出ると、酒も女も存せぬ知らぬと云ふ程顔に勉強第一の看板を掲げてゐるけど、こんな所へ時々来るかも知れんねえー」  
「それは左様かも知れませんが、だけど親父が人一倍氣が利いてゐるから、知つて知らん顔するでせう。」

「せざるを得んぢやないか。」

「頼もしい親父だなアー。」

「親父親父と大きな聲で云ふなよ。まだ小皺一つ有りやせんぞ。ウワハツハ。」

此の愉快な市長を圍んで、杯の音、哄笑のさどめき、ライオンは若人の高らかなブライドで充ち満つた。三浦市長の眼には往年を想ふ感慨が、深く深く宿つてゐた。

### 嫁ぎゆく人は跪く



私の所へ遊びに来る帝大のR君と、某嬢とは熱烈な戀をした。女の両親は男が在學中なる故を以て、何うしても二人の結婚を承諾しなかつた。そののみか其の相愛を無理に割かんが爲めに、女を他に嫁がしむ可く急いだ。此の手紙は其の女から最後にR君に與へた手紙である。愛を割かれて嫁ぎゆく人の叫びは何と悲痛であらう。全文これ魂の叫びである。世の親人よ。若人の心を心とせよ。

◎

やるせなく降る雨のわびしい音に、冷い壁に身を投げてさめくくと泣いた後は、唯靜に壁なき壁の壁をきく淋しいあきらめの心でございます。

暮れようとする窓のあたりに水底の様な冷かな光りと寂寞とが流れて居ります。そうしてそれらの光りは、静けさは、まゆ毛のひまに、墓場の様な、寂しさと悲しさとを植ゑつけて行きます。

いよく別れて嫁がなければならぬ日が來て了ひました。せめてもう一度なり

と、願つた日は空しい煙りでした。

泣けるだけ泣いても見ました、而し今となつてやつぱり私しの行くべき道はこれよりほかないのを知らねばならなかつた時、従順に運命のまゝに行くのがやつぱり宿命だと思はずには居られない氣持でございました。どうすることも出来ない運命の上にあつたあたし達だつたのですわね。

逢へば別れねばならない、人はやつぱり永遠に孤獨の旅をつとけねばならないのでせうか、あなた！あなた！半生を戀しつとけた、否え、あたしに最初にそして最後まで戀を與へたあなた！私はこのまゝ別れるのに偲びない悲しさを思ひます。この先如何なる運命の海に浮ぶ共一生涯忘れ得ぬ私しの幻なのです。

私は運命の神を呪ひ度い。

呪つても、呪つてもあき足らない。

而し、現實の「運命」の前にどう致しませう。あなたもお忘れになつちや嫌、どう

ぞおほへて頂戴。死ぬまで、否え死んでもおほへて頂戴。私は嫁ぎます。

あなたの愛を、全愛を胸に秘めて、そうして嘆きの胸を眼に微笑みを見せて参ります。あたしのこの胸の内を、悩みを、悲しさを、本當に知つて、泣いて下さる人はこの廣い世の中に貴方しかない。

戀人よ、あゝ本當に私の胸の内がどんなだか解つて下さいますか。

あの時、あの横濱の驛で汽車の窓に見た戀しい人のお顔が最後にならうとは誰れか思ひ見たでせう。

どうしても嫁いだ方がいゝと仰つたあなたでした、私はその時はどうしてもゆけない氣持でした、而し、今となつては、そうするのが運命への道だと考へずには居られない様になつて了ひました。それが宿命でせうか。私は逢ひ度い。限りなく逢ひ度いと思ひます。でもそれは出來得ないこと、又却つて逢はずにゐたい氣もします。逢つたら、私にはとても堪へられないでせう。

やつぱり、やつぱり、私は、——あたしは逢はずに行きます。どうぞそうさせて下さい。その方が諦らめがつきます。

私はお手紙の約束もしました。而し今になればお手紙も書けないだらうと思ひます。どうぞあたしの氣持を察して頂戴。ね、あたしが心から書く手紙！ いつかは又書かねば堪らない様な時が來ないとは、それは神のみが知り給ふことには相違ないけど、でも、それもやはり運命の致すところ、やつぱり私には書けないと思ひます。

本當に愛する時、本當に愛するものに、どうして、いゝ加減なものが書いて出せませう。あたしの氣持がわかつて下さいますか？ どうぞわかつて頂戴。お手紙もせず、逢ひもせずに居ることがどの位私の心を暗いものにして下さるか、貴方も解つて下さつてる筈ですけど、やつぱりそうせずに居られないと思ひます。でも、でも底のく扉のかけには永遠に消すことの出來ないつかしいお名前が彫つてあります。いつもじつと抱きしめて、そうして考へる時、私は私を失つて了ひます。



では、戀人よ、さようなら、さよなら、あれ程愛して頂いた戀人の胸を去つて運命の海に乗り出して行く彼女を世にも哀れな女と同情して頂戴。そうせなければならぬ。彼女の胸は兎てもこゝに書くことは出来ませんの。

戀人よ、名残つきない筆です。何と云つても思ひ切れない筆です。

戀人よ。どうぞこの上にキツスを熱いキツスをして頂戴。この上には限りなくあたしの涙まじりのキツスがしてあります。

『強きことを書いておさめし後にして、ふとこぼれしは何んの涙ぞ。』

### 著作生活の回想

東京の大新聞から「如何にして貴下は今日を得たか。名を成すまでの回顧と感想を何卒お洩らし願ひたい。」斯う云ふて來た。そこで私は十二年前の昔を追想しながら



次の一文を送った。私の最近の寫眞と共に、それは直ちに新聞に載せられた。記念の爲めに轉載する。

◎  
私が始めて筆を執つたのはかの「大學出の兵隊さん」である。「大學出の兵隊さん」は私の處女作であり、又一番の傑作であつた。私は型の如く學校を卒へてから一年志願兵になつた。その軍隊生活には全で我々が想像出来ない面白いことがあつた。で私は其れを書いて「中學世界」に試みに送つて見た。その頃の「中學世界」は若い者に採つては云はゞ登龍門みたいな權威を持つてゐた。その原稿は一度でパスした。確十一月號であつた。續いて十二月にも何か書いて寄越せと云ふて來たので又書き送つた。所が非常に其れが大好評を博したと見え、編輯者から「同じ原稿を年越しさせることは殆どしない不文律になつてゐるが、君のは實に面白いから、本年もズツと書き續けてくれ」と云ふ雀躍する手紙を受取つた。編輯者から更に「博文館内ではあれが大評

判で主幹の坪谷水哉氏は此の執筆者を出来る丈け優遇しろと云はれた』など云つて寄越された時には全く飛び上がる位であつた。それから翌全一年は連載された。其の頃の中學世界の新聞廣告に大きな活字で——大評判になつた「大學出の兵隊さん」など出たのを見る毎にビヨン／＼躍つたものであつた。願みれば十二年前でさる。

◎  
何うして又あゝ云ふ諷刺滑稽物を書いたかと云ふと、何しろ其の頃は無名の者は今と違ひ何うしても文壇に飛び出せなかつたものだつた。假令どんな傑作を書いたと認められる時代ではなかつた。そこで私は何うかして名を成したい、それには今までの文人の書いてゐる様なことを書いてゐては大同小異でいつ迄たつても頭が上がりない、一つ何か目新しいものを書いて呀ツと云はずに限ると思ひ、さてこそあゝ云ふ變つた所を狙つたのだ。それがうまく時代に適中したんだから、痛快この上なかつた。何故又あゝ云ふ諷刺滑稽物を選んだかと云ふと、私は其れまでに有りとあらゆる物を

読んで見にが、どうも軽快な本當に胸をスガ／＼させる様な讀物に一度もブツからなかつた。それ許りか涙を多く流させば流させる程その小説は傑作だと認められる様な重苦しい讀物時代であつた。私は人世は涙でなくして笑ひであると云ふ主張者であつた。その喜笑を催さず讀物を書く文人がゐないから小説と云へば泣くものだと多くの讀者に印象させて了つた。それが不可ない、それを破つてやれと云ふ氣持ちを絶えず持つてゐた。果して「大學出の兵隊さん」の空前の當りを見て、私の想像を裏切らなかつたことを知つた。私は其れから續いて「中學世界」に二年間も連載物をし、傍又新に本を下シ／＼書いた。皆面白い程よく賣れたことから察すると、その頃どれ程世間が軽い讀物を渴求してゐたかと解る。

◎  
一體諷刺滑稽物は、如何に有名な文人でも若し其の人の性質に天來の滑稽味とか辛辣な皮肉とかが無かつたら、到底それは書けるものではない。生れつきが自然に書か

して呉れるのだから、滑稽を書かんが爲めに書くのではない。これ丈けは眞似の出来ぬものだ。無理に眞似をしたら極めて不自然なものになつて了ふ。そう云ふものは永續きはしない。

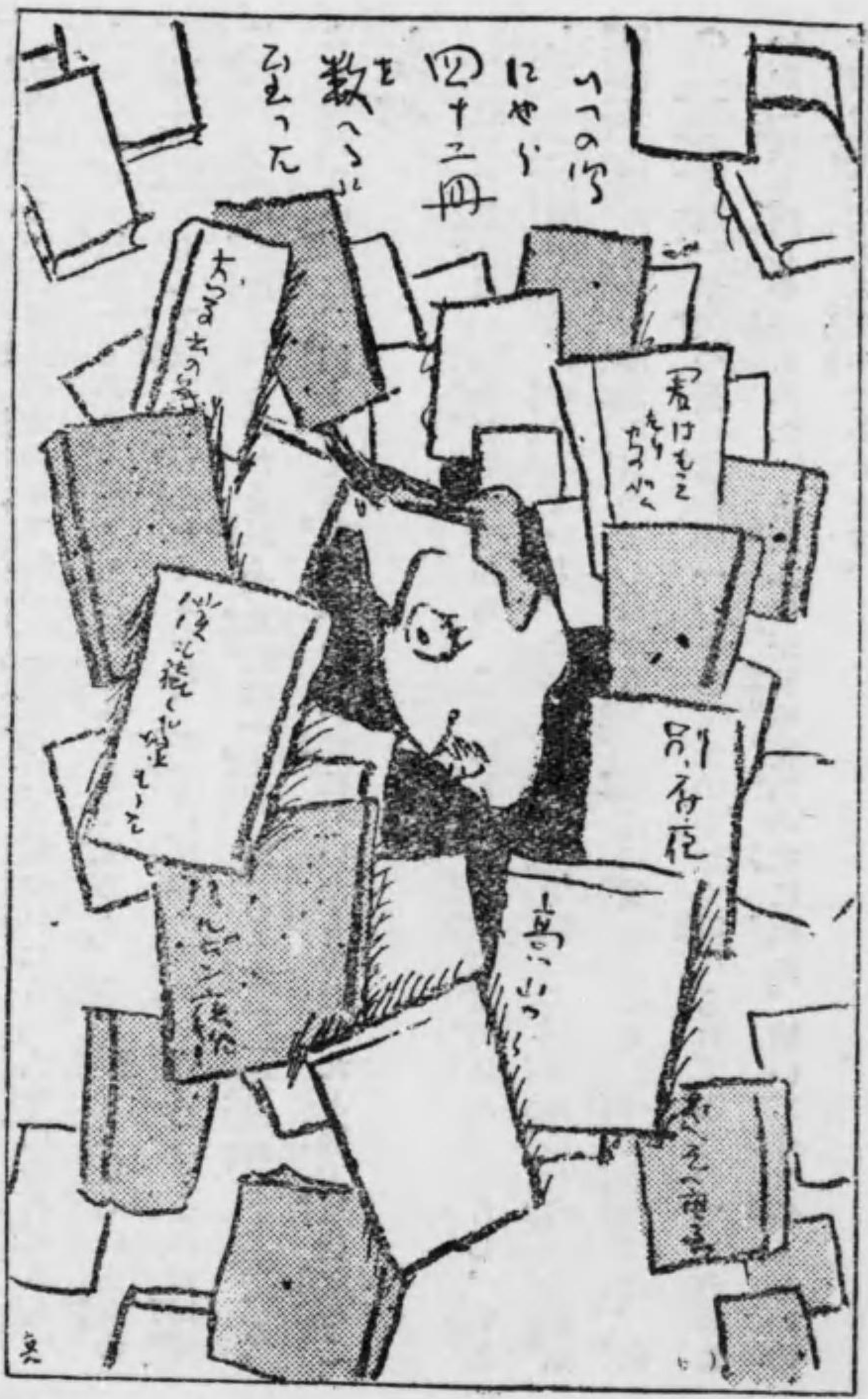
◎  
それに又私は滑稽物を書く時には、非常な快活な氣持ちの日のみを選んで書く。少しでも悲しいとか又淋しい時には何うしても筆を執らぬ。其れが紙の上に現れるからだ。悲しいも嬉しいも精神である。氣持ちのよい精神を現はすには氣持ちのよい日を以てせねば情が出て來ない。私の滑稽物を書く秘訣は其處にあつた。

◎  
借て、出す本も出す本も餘り賣れるので、眞似する本が箱の様に出て來て、私の本の題と似たり寄つたりの物が多くなつて、多くの讀者が迷ふ様になつた。そこで斯うなつたら方面を變へて一つ息を抜いてやれと許り、私は戀愛物に筆を轉じた。そして模倣するものゝ影をひそめた頃になつて、ちよい／＼と滑稽物を書いた。斯くして遂に

今日まで續いて来た。私は始めて世に出た時、生涯の中に三冊の本を出せばそれで満足だと思ふてゐたものであつたが、いつの間にも四十二冊を數へるに至つた。考へて見れば「大學出の兵隊さん」が當つたことが此の道の者にさせたのだ。元來私は柔道や野球で鍛へた頑丈な逞い身體を持つてゐるので、方面違ひも甚だしかつた。身體から云へば軍人が一番ふさはしいと誰れでもが云ふ。人は生優しい男を想像して、逢つて見ると餘りの骨格に驚嘆久しうする。それほど私は一般の豫想を裏切つてゐる。

◎

私が絶えず著作の標語としてゐるのは「事實を書け」と云ふことである。「事實は何よりも傑作なり」と信じてゐる。だから私は、私のみならず友人の話でも事實と認めたいものなら、喜んで材料にしてゐる。友人の迷惑を察し皆私が爲した如く書いて置くが、事實は何處迄も事實である。現代は空想ではない、眞に相手を動かすには事實に優る力はないのである。



私の今日までの澤山の本の中で何が一番傑作だと訊かれたら「大學出の兵隊さん」と「ハルビン夜話」である。読者も左様云ふ。して見ると、全で變つた新しい方面の描寫は著者からして既に好奇心をそゝられ、執筆に萬腔の興味を覺えて、それが同時に讀者の胸に放送されるのだと思ふ。私には一番賣れてゐる本が一番傑作とも云へる。よく賣れない本は、何うしても氣の乗らない時に書いたものだつたと後で思ひ當ることが多い。

最近出た新刊は「別府夜話」である。これは書店は非常に意氣込んでゐるし、私としても又表装や其他に申分もないし、それに従來と全で變つて三頁毎に有名な漫畫家服部亮英君の輕快な漫畫を以つてしたから目下盛んに賣れてゐる。今の調子では、此の「別府夜話」が矢つ張り傑作の一つとして世の中から迎へられてゐるのではあるまいか。「僕も嬉しや嫁もろた」と云ふのが別府夜話の次に出た。續いて今又新しいのを書き續けてゐる最中でありませう。

## 彼女等と私の半日

「あ、もし、もし、他見男さん？ 私しよ、磯内よ、解つて？ あの明日ね文子さんの所へゐらつしやらない？ 文子さんに先刻お目にかゝつたら貴方の話が出たのよ。そしたら是非明日三人で遊びませうつて、他見男さんをお誘ひするのは貴女に任かすから、確つかり遊ばせと仰しやるんですもの。どんなにお忙しいたつて来て下さいね。いゝでせう？ いゝと云つて頂戴よ。でないと私しが困るのよ。もし、もしつたら。何故黙つてゐらつしやるのよツ。」

「考へてゐるんですよ。」

「考へなくてもいゝことよ。ちや午後の一時に文子さんのお家まで来て頂戴ね。まあ嬉しい、ちや左様なら。」

勝手に云つて勝手に合點し、勝手にブツリと電話を切つて了つた。

磯内さんとは女子大學の學生である。脊は低いけど、彼女の矜持さは其の眼で知ることが充分に出來た。男を男と思はぬ程、男によく馴れてゐた。けれども何處か確つかりしてゐる所があつて、兎角噂の出る女であるけど、私は飽くまで彼女を信じてゐる。或る男があつて、彼女が一人であることを見たことがない。必ず男と一緒に。目下某大學生と夢中になつてゐる。よく二人で薄暗い所を歩いてゐる。それ等から察しても、怪しむ可き節々が多いと云ふ。然し其れは皮相の觀であつて、私はホンの一度しか彼女と一緒に散歩してゐなかつたが、その一度で充分に彼女の性格を知る事を得た。とても若い男の口車に乗る様な女ではなかつた。それでゐて、よく誤解されるのは餘りに容易く男と知合になるからであらう。どこか彼女には彼女の人生觀と云ふものが存在してゐる様に私に思はれてならなかつた。百人の男と遊んで百人の性格を知らうとする様な興味に捉はれてゐる超越的の所が私にはよく解つた。い

つか私は『貴女は結婚したら?』と勤めて見たら、『私し結婚の出来る様な柄ぢやないわ。又結婚したつて、私を壓へる文けの男の方に一度も逢つたことがないわ。』と、笑ひながら答へたから、

『ぢや何うする積りだらう?』と訊いた。

『そんな事、考へて見たこともないわ。宿命論者だから。ねえ他見男さん其處ことお訊きになるよりか私を愉快に遊ばすことを考へて頂戴よ。』斯う云つた女だ。

そんな會話をして別れたのが半年前だ。忘れたのか外に澤山の男の友達があつて其等の連中と遊ぶのに急がしかつたのか、否として彼女の消息は私から絶えてゐた。そこへ測らずも此の電話である。

私が文子さんと相識つた最初は私が舞踏に熱中してゐた頃であつた。その頃よく私は京橋の某舞踏場に入つてゐた。文子さんは其處へ一週間に二度位顔を見せた。小柄で少し肥え氣味ではあるが、その顔は全て西洋人形そつくりで、可愛いと云へば此

麼可愛いお嬢さんがゐるものかと思ふ許り可愛かつた。私は彼女を活ける人形の氣味で愛し、彼女も又私を良き小父さんと許り慕つてゐた。

或日、いつしか日が暮れた。彼女は其れをヒドく心配して、どうして今日はツイ時間も忘れて斯うして過して了つたんだらう。困つたわと、暗みゆく空を仰いで悲觀してゐたから、それぢや私がお宅まで見送つて上げませうと、彼女が濟まないと遠慮するの構はず左様云ふと、大變喜んで其れでは家でも安心しませうからと、一緒に連れ立つた。そして赤坂の彼女の宅の前まで送つてから左様ならすると、是非一寸でもいゝから家へ入つて呉れと云ふ。でないとお母様は夜道を一人で歸つて來たと思ふて、今後出して呉れないから、お母様に顔だけでいゝから見せて行つて下さいと再三強請むので、それではと私は思ひ切つて、彼女の家の洋館の應接室に通つた。お茶だの、お菓子だのと御馳走になつてゐる所へお母様が顔を出した。

「まア本當に濟みませんでした。娘がどんなに喜んでゐるかも知れませんよ。遅いか



らと心配してゐたんですよ。でも貴方みたいな方に送つて頂いたんだから、安心致しました。どうぞ之を御縁に宜しく願ひ致します」などとお母様は總かり喜んで了つた。そこへ又豫ねてから私を一遍見たい〜と姉さんに強請んでゐた或る大學の豫科の弟さんが、恥かし相にして入つて來た。文子さんは「本當に弟は人前へ出ると、いつも斯うですよ」と、弟さんをモドかし氣に見ながら私に告げた。斯くして私は全部の人と知合になつて別れた。

それから私は何と感じたかバタリと其の舞踏場へ行かなくなつた。同時に文子さんとも逢ふ機會がなかつた。その後、磯内さんから自分も文子さんの友達であることを聽かされ、同時に二人で時間を合はして文子さんの家へ行つた。その時文子さんの人妻になつたことを訊いて、人形さんでも女は年頃になれば矢張りお嫁さんに早變りするものだなと、ツク〜私は感慨に耽けつた。それなら斯うして私見たいな男が來ると云ふことは、良人たる人に濟まぬからと、腰を上げると、いゝえ、いゝえ良人は其

應開けない人とは人が違ひます。そりや捌けた却つて斯うして私が愉快に遊んでゐるのを大變喜んで呉れます。殊に先生の噂なんか始終出てゐるんですもの、どうぞ御遠慮なく」と、垢ぬけのした云ひ分である。「若し歸つて來ましたら御紹介しますわ」など益々さつぱり出た。折悪しくか折よくか知らないけど、兎に角良人の君殿は其の日私のある間には歸つて來なかつた。「又いつか遊びませうね」と、云はれながら、電車道まで送られて、其處で握手して別れた。

それツ限りである。そこへ磯内さんからの電話であつたのだ。書き忘れたが電話の時、磯内さんは文子さんの家は今度親許から離れてツイあの家の筋向ひに移轉されたから其のお積りでと云ふことであつた。今までは娘が可愛い故でもあつたのか、別に養子でもないのに良人は文子さんの家族と同居してゐたのだ。矢張り同居は時に面白からぬ空氣を漂はすと見えて、世間によくある別居と云ふことになつたのであらう。その別居も遠く離れてゐては何かと不便だとあつて、親の目の前へ、形ばかりの

移轉をしたものと見える。

翌日私は約束した譯でもなかつたが、執方にも久振りで逢ふんだからと出掛けて行つた。一時と云ふ報らせではあつたけど、私は十二時半に先方へ着いて了つた。

立關をあけて、『御免』と云ふた。出て来たのは女中であつた。私は何う云はふか知らと思ふた。旦那様らつしやいますかなら解つてゐるが、初めての女中に此處男から『奥様らつしやいますか』は何うも變だ。何だらう？と思はれる杞憂なきにしもあらずである。そこで私は『磯内さんが來てゐますか？』と訊いた。その方が一番無難だと思ふたからだ。『いえ、でも一寸お待ち下さい』女中は急いで二階へ上がつて行つて、直ぐ又下りて來た。

『只今、奥様が見えますから、どうぞお待ちなすつて下さい』と答へてゐる所へ、文子さんが下りて來た。

『まあ私し此處に頭を亂して、それに此處汚い風をしてゐて』と羞かみ一入を見せな

から、『今から、仕度をしやうと思ふてゐたんですよ。だつてまだ時間が卅分もあつたものですから。さどうぞ。私し一寸失禮しますわ』と、障子の影に身體を隠す様にしてゐた彼女は、其の儘次の部屋へ慌てゝ入つて了つた。餘ッ程氣極りが悪かつたのであらう。

私は女中の案内で二階へ通つた。紫檀の机を中央に、壁額には山縣公の揮毫を飾り、床の間には寺崎廣業の山水畫がかゝつてゐた。隅にある火鉢には金の模様がピカ／＼し、見るもの皆、己れの家みたいな雅邦の藝術を掛けて置いて來客を瞞着してゐるのと譯が違ふ。

これは私の経験する所であるが、東京では相當の家の娘を嫁入りさせる時、二人が家を持つた時、娘の親は餘ッ程可愛いと思ふてか、新世帯の大概は娘の親がしてゐる様子がある。別に其れは義理とか何とかでなく、唯さうするのが親として楽しみらしい。細上君だつて左様だ、村本君だつて左様だ。二人共、娘の自宅のツイ前へ家を





構へさせられてゐるのみならず、別居と云ふのは名ばかりで、何から何まで娘の宅で始末してゐる。だから兩親から愛されてゐた娘の良人になつたものは居ながらにして、大厦高樓とまでは行かないが兎に角一躍相當な家に收まる事が出来る。それに娘は皆顔に白粉をぬらないでも美人ばかりだから果報なのは其等の良人共である。

トン／＼と階段に足音がしたから、私は一寸居住まひを正した。文子さんは先前見た時より全で見違へる許り美しい着物に美しい顔になつて入つて來た。

「ねえ、文子さん、貴女を貰つた人は幸福ですねえ。ピカ／＼した貴女だの火鉢だのを頂戴出来るんだもの。」

文子さんは吃驚して火鉢を見た。

「斯うも何もかも充實させて呉れる親は有難いものですねえ。」

「いえ、私は却つて良人に濟まないと思ふてゐるんですよ。この不景氣ですから最初の約束と大分違つたのですもの。まだ何も揃ふてゐないんですよ。」

「そら、そこに金屏風がある。そら、そこに銀の煙草入れがある。」

「だつて、これつばかしのもの。」

「貴女は腕に白金の腕巻をしてゐる。頭にフランスの櫛をさしてゐる。合掌ツ。」

「全く合掌だから、もう窘めないで頂戴。ねえ先生、先日奥様の御寫眞が新聞に出てゐたんですつてね、拜見したかつたわ。」

「先生、先生と云ふと、奥様、奥様と云ふよ。」

「でも他見男さんなんて、何だか失禮ですもの、第一年齡が大分違ふんですもの。」

「あゝ、益々こりや不可ない。どうか年齡だの先生だのは世の中のない言葉としませう。」

「困るわ、でも。」

「磯内さんなんか、他見男さん、他見男さんと云ふて呉れるよ。あゝでなくちや。」

私は顔の小皺をお手々で隠して云ふた。

「ちや失禮ですけど御免遊ばせね、私だつて他見男さんと云ひますわ。ね御免遊ばせね。」

これが人妻かと怪しまれる許りの、まだ可愛いあどけない顔である。

「一寸お聞き致しますが、貴女は戀をしたことがありますか。」

「いゝえ知らないの。女の癖に腑甲斐ないわねえ。何うしたんでせうね。それに就いて色々考へて見ましたら私の親類に若い男の方が澤山ゐるの。そんな人と小さい時から始終遊んでゐた故か、私には女のお友達と、男のお友達の見境が附かなくなつて、同じ様に思はれてならなかつたの。そのうち斯うして結婚して了つたんですもの。」

「ちや今の良人とは相愛で結婚したんぢやないんですか。」

「まア、戀を知らないと申しましたのに。今の良人は疾くから定まつてゐた親戚の人なの、お互は何とも想はないで結婚したんですよ。だから私は斯うして一生愛だの戀だのと知ることなしに終る人間なんでせうね。」

「良人は貴女を愛して呉れていますか。」

「解らないわ、どんな事が愛なのか。私は生来そう云ふ事に考へて持つた事のない人間よ。でも時々芝居だの活動だのに連れて行つて呉れますから、あれが愛でせうか。」

「愛だツ、それが愛ですよ。」

「ちや愛すればこそお芝居だわねえ。」

二人はオホツ、ウワハツと高笑ひした。

そこへ磯内さんが入つて来た。

「何を其處に笑つてゐらつしやるの？」

「愛すればこそお芝居、解つて？」

「解らないわ。」

「貴女は誰方が男の方に帝劇か歌舞伎へ連れて行つて貰つたことがあつて？」

「そりやあるわ。」

「愛すればこそだわ、オホツ。」

「餘り澤山で、どの人が愛すればこそだか見當が附かないわ。」

「貴女らしいお返事だわねえ。さ、さ、坐つて頂戴。私し只今紅茶を持つて来るから。」

「女中にさせたら、いゝぢやないの？」

「だつて少しほんやりさんだから、何をして来るか解らないんですもの。」

「あら、ほんやりさんなの。田舎者？」

「え、でも、そりや正直よ。」

噂をすれば影とやら、そこへ女中がバタン／＼上つて来て、

「奥様、着屋さんが何か御用が御座いませんかつて」と、大きな聲で飛び上がらせる。

「御客様の前であれでも、協はないわ。……え、今行きますよ」と、立上がる。

「イヨ、奥様しつかり。」

「まア先生。」

文子さんは直ぐシツペイ返しまして下りて行つた。

「奥様と云はれると、嬉しいだらうね？」

磯内さんに訊いた。

「何うだか知らないわ。私まだ経験が無いんですもの」こいつは恐れ入つて了つた。

「でも推論を下すと、悪い気がしないものでせうね。けれど私共としては奥様とお呼

びするより文子さんと云ふた所に、打ち解けた漂ひがあるぢやないの？」

「僕が推論する所に依ると、あゝ云はれると、憚りながら顔がお人形さんでも、これ

でも一人前よと云ふ自負心があつて愉快だらうと思ふ。殊に奥様と云はれることはつ

まり尊敬代名詞で、可成優越感をかんずるだらうと思ふ」と、云つてる所へ、「何を議

論してゐらつしやるの？」と、優越感が入つて來た。

「今貴女を推論してゐたのよ。奥様と云はれるのが嬉しいか悲しいかかつて。」

「嬉しくもあり、悲しくもありだわ。」



蓋し適言である。

文子さんは舞踏が上手であつた。磯内さんは其れを知つてゐて、負け嫌ひな性として是非教はりたかつた。そこで文子さんに勧められて遊びませうに托つけて、巧みに私をおびき出したものだ。到頭二人で白状した。他見男さんなら、外の男の方と違つて信用してゐる方だから、あの方に習つたが一番だからと、私が勧めたんですよと文子さんが云ふた。

『この通り、蓄音機もレコードも用意して置いたんですから、御氣の毒様ですが、どうぞ宜しく。』

うま／＼と私はわなに引掛かつた譯だ。今更後へも退かれず、此の頃全然その趣味が失せてゐるとも云へず、『えゝ遣りませう』と、承諾した。『まあ嬉しいわねえ』と、二人は眼をお習字の一の字の様に細うして喜んだ。

レコードが鳴つた。先づ文子さんと踊り、次に磯内さんを相手にした。『本當に私し

始めてよ、ね何うするの、足を？』と云つてた癖に仲々上手だ。どうしても始めては無かつた。到頭先日文子さんに、汗の出るまで教へて貰つたと口から出した。

幾度も幾度も踊つた。『お疲れぢやないこと？ え？』二人は私の機嫌を取りながら夢中になつた。悉ゆる舞踏レコードを皆踊つた後、私と文子さんとはアンビラ・コーラスをかけて見た。これは社交舞踏曲ではないけど、二人は其れに合せて巧みに踊つた。踊り終つてから、『本當に此の曲は變化があつて面白いわねえ』と、二人は喜びの微笑を交はした。

私は此の日、岳君を訪ねる約束をしてあつたので、銀座へ出かけて行かなくてはならなかつた。時間までは云つておかなかつたけど、彼の會社の退けるまでには一時間しかなかつたので、急いで左様ならした。『も少し、ね、もう少し』と二人は大に愁嘆場を見せたけど、私はブツリと振り放つた。勇ましき限りにこそ。

それではお見送りしますと電車道まで来た。私は眞晝中だから恥かしい思ひがして

『お歸りなさい』と頻りに勧めたけど、報恩の萬分の一だと云ふて聴かなかつた。銀座へ来て、岳君を訪ねて行つた所、彼は餘り私の來方が遅いので、私の所へ行くといつて出かけて了つたと云ふ。實に失禮をしたと暫らく應接室で私は良心にさいなまれてゐた。何時までも虐まれてゐることは出世する道でないと思ふたので、近くの讀賣新聞社へ立寄つた、そこで友人の二人に逢つた。雑談して又岳君を訪ねたけど、矢つ張り未だ戻つてゐなかつた。

そこで近くの喫茶店へ入つてコーヒーを飲んでゐると、桑田と云ふ今年大學を出た青年が『暫らくでした』と聲かけて近寄つて來た。二ツ三ツ話をしてゐると、『貴方をサイドカーに乗せてお宅までお送りしませうか』と云ふ。サイドカーと云ふのは、オートバイの横に箱の附いたのだ。私は一度桑田君にオートバイに乗せて貰つた時に、飛行機に乗つてゐると此處ものか知らと思はれる程早いのに感心して了つたことがある。自動車の二倍位の速力である。それ以來と云ふものは桑田君の顔を見るとオート

バイが眼の先きにチラついてならなかつた。そのオートバイの話が出たものだから、彼は今斯う云ふたのだ。私は雀躍りして頼む頼むと云ふた。

彼は私をサイドカーに乗せて『ようござんすか』と云ふが早いか瓦斯管が破裂する様なポツポツと音を出して、把手を握つた。そして走らせた。スーツと空気を吸ふた裡に京橋へ來た。その空気を吐き出した時に二重橋が近くに見えた。和田倉門、三宅坂、半藏門、またよきの裡に過ぎた。四谷見附、鹽町、今や新宿へ來ようとする時、私は『一、一寸待つた』と慌てよ止めた。恰度開店した許りの、新宿では第一の喫茶店の披露招待券を持つてゐたことを急に思ひ出したからだ。私は一枚あつたから、是非君もと中へ連れ立つて入つた。

キビくした程氣持のいい女給監督の小野女史に其れを見せると、『まあよくこそ』と、喜んで迎へた。小野さんは此處所の監督に惜しい確かりした頭のいい親切な人であつた。

二人は空いた椅子に坐つて、花束に囲まれた喜びの第一日の夜を壽きながら、乾いた咽喉に、あたゝかい飲物でうるほひを持たせた。

## 山本君の創作

逝く春の夜であつた。

銀座の街は、盛装した美貌の女優のやうに絢爛やかに輝きわたつて、舗々の灯は櫻貝のやうに光り、毬型の街燈は眞珠のやうに燦いてゐた。並樹の銀杏の枝には瑠璃色の狹霧が降りそゞぎ、舗石道に群がる人々は爪先舞踊のやうな軽快な歩調で往き交ふて、巖惑的に化粧した女の赤い微笑が、紅罌粟のやうに街上に亂れ咲いた。——夜の都會のありとあらゆるものは、春の愛撫に飽いてゐた。

官廳の執務から解放されたばかりの柳田は同僚の石満、山縣、松井の三人と一緒に



伴れ立つて、銀座の人波の中を遊いでゐた。誰も彼も、このまゝ家へ引込みたくはないと云ふやうな顔付をしてゐた。

いつしか四人はひそくと話合つたかと思ふと、彈機人形の玩具の展覧會のやうに混雑してゐる尾張町の十字路を曲つて、有樂町の停車場の方へ歩いて行つた。

數寄屋橋の向岸には、淡紅色の夜會服を着た邦樂座が、華やかな姿を、椿油を溶かしたやうな夜の堀割の水に映してゐた。

◎ 十分ばかりの後、彼等四人は櫻木町行の省線電車に乗込んでゐた。

車内は、クリーム色の春帽子の會社員、耳隠しに結つた女店員、玉蟲色の春外套を着た學生等が、押し合ひへし合ひして混雑してゐた。一日の仕事に疲れた皮膚の匂ひや化粧のくづれた香に交つて、黄色い汗の霏が一杯に立罩めてゐた。

電車は急速力で、賑やかな都會の中心から、寂しい郊外の方へ遠ざかつて行つて、

各驛々に光の花瓣を撒き落した。

彼等は、鬨やかな女の手を握るやうに、吊革の白象牙の環にぶら下りながら、あたり構はず喋り合つてゐた。

綾絹を裂くやうな鋭い電車の警笛や、軋る車輪の響は、恰も輕妙な夜曲のやうに彼等の遊情を揺り動かした。——停車場の信號燈の赤い灯までが、歡樂の表徴のやうに闇に瞬いてゐた。

◎ 櫻木町で降り降りた彼等は今度は市内線に乗換へた。

春は今、萬物を支配してゐるが、震災の傷手から立上つたばかりの横濱の夜は寂しかった。恰も重患の床から起き出でた女の、瘦細つた指先に血汐が匂ひ染めたやうな街々の姿であつた。この傷痕と寂寥の中に、紅く焼け爛れた歡樂の翼が物狂しい羽搏きをしてゐるとは微塵にも考へられなかつた。——小さな黄色い搖籠のやうな電車は、



歡歌きながら場末町の方へ走つて行つた。

十二天で電車を乗り捨てた彼等は、暗い露地の方へ曲つた。

軟かな大地の吐息のやうな微風が、愛嬌よく彼等の頬を撫でたり、頸筋に戯れついたりして、瑠璃色に晴れた夜空には、綺麗に薄化粧をした無数の星が嬉れしさに囁き合つてゐた。

男爵の石満は、一番先登に立つて案内顔にすたくく歩いて行つた。彼等の遊蕩心が一様に彼等の心臓の中で波打つた。

最後の露地を右へ曲ると、彼等の眼の前に二軒並の家が現はれて、表現派の舞臺に飾られるやうな二本の四角な街燈が立話をして居た。怪奇な夜守が匍ひ着いてゐるやうな硝子の面には、右手のには MINATO HOTEL、左手のには AMERICA HOTEL と赤い羅馬字で書いてあつた。

石満は、右手の家の玄関へ導く舗石道の上を、物馴れた態度で踏込んで行つた。さうして橄欖色のベンキで塗られた扉を排して、

『ママさん！』と聲を張上げて呼びかけた。

『あら、石満さん！ 姑く、さあお入り下さい……』

男爵に續いて三人も中へ入つた。上口の所にはママさんの外に豊かな髪を耳隠しに結つて、濃厚な白粉の中に、魅力的な眼眸が黒猫の瞳のやうに光る二十三四の女が立つてゐた。

胭脂色の大柄な縞御召の袷を着て、華美な櫻の花模様錦紗の羽織が、肩から滑り落ちさうに引掛つて、胸や腰のあたりには、明治初年頃賣出した版畫の錦畫のやうな曲線が律動してゐた。——「長崎のお菊さん」の品の悪いのが畫布の中から浮き出て來たのではないかと思はれた。

女は愛想よく『まあ、よくいらつしやいました。——どうぞ。』

斯う云ふて女は先に立つた。美しい襟足が蠟細工のやうに輝いた。石満は自分の家のやうな態度をして上つて行つた。

上口の右手は酒場のやうになつてゐて、異國的な色彩を持った洋酒場が、道化役者のやうな恰好をして、棚の上に二三列立並んでゐた。夏蜜柑や林檎が媚を賣る女のやうに籠の中に座つてゐた。

狭い廊下には栗色のリノリウムが敷き詰めてあつて、石満の黒ギツトの短靴、柳田のチヨコレート色の短靴、山縣と松井の爪先エナメルの編上靴が、其の上を滑つて奥の方へ消えて行つた。

◎

廊下の左右は、淡紅色の屏が並んでゐて、小さな部屋が十位に仕切られてゐるらしかつた。鍵の手に曲つた廊下の突當りの部屋は、舞踏が出来るやうに二十疊敷位の廣間になつてゐて、天井から安價なシャンデリアが藤の花の蕾のやうに吊下つてゐた。



石満が入り行くのを  
 人よこ女達も  
 洋人の面と  
 新れと  
 可愛相よく  
 迎へた

庭に面した方は硝子戸になつてゐて、外には支那漆のやうに暗黒な夜が窺ひ寄つてゐた。一方の壁際には、四五脚の卓子が置いてあつて、卵色をした壁間には女の裸體姿の油繪が懸けてあつた。片隅の卓子圓上には贅澤な蓄音機が置かれてあつて、その傍の花鉢臺の上にはオスカークワイルドの詩のやうに耽美的な八重咲の鬱金香の花が咲き匂つてゐた。

壁側の卓子には三人の若い西洋人が、四五人の女を相手に酒を飲んでゐた。爛れたやうな酒の香が彼等四人の嗅覺に粘り着いた。

石満が入つて行くのを見ると二三の女達は西洋人の卓子を離れて愛想よく迎へた。彼は得意満面として片隅の籐椅子へ悠然と腰を下した。

女達は、石満等の卓子の側へ寄つて來た。恰度、餌に寄つて來る動物園の鹿のやうに……。一人は眼の大きな、下膨れの杏色の頬を持つた二十ばかりの女で、頭髮を耳隠しに結つて、脂と汗とで汚れた友禪縮縮の着物を着てゐた。時代遅れのした紺茄子

地に菊の花模様が散らしてあつた。その菊の花が傷ましいまでに色褪せて凋萎してゐた。

他の一人は、黒碧色の腫を持つた混血兒であつた。髪を無造作に束ねて、白浪五人男を描いた錦繪模様の友禪羽二重の長襦袢を一枚きり纏つてゐた。——黒地に赤線の入つた博多の伊達巻が南洋蛇のやうに腰の周圍に絡みついてゐた。

他の女達は西洋人の傍を離れなかつた。

肌が透いて見えるやうな薄絹の、黒いアンダーシャツの上に、けばくした色の羽織を引掛けたもの、燃ゆるやうな眞紅の牡丹模様の友禪縮緬の着物を着たもの、茶褐色の洋服を装ふてゐるもの等、地獄の百鬼が夜行するやうな怪異な扮装をして居た。

——斷髪にしたり、縮らかしたりした頭髮も却つて調和してゐた。彼女等は、蒼浪の間に幾千年となく棲居する人魚のやうに、或は外人の膝に腰をかけ、或は膝の上に仰向きに上半身を凭れ、或は頸筋に絡みついてゐた。時々、塵埃溜へ唾を吐くやうな接

吻が取交はされた。

廣間の中には、脂粉の香と暖かい體温とが氣味悪く渦巻いて、淫蕩と頹廢とが安價な煉香油の腐敗して行くやうな雰圍氣を醸してゐた。

石滿は溢れるやうな悦びを顔に現はして、頻りに飲物を女達に注文してゐた。然し柳田等は其處の情景に壓倒されたやうな氣持に捉はれて、初めて巴里見物に出掛けた黄色人種のやうに、妙に不安な氣分に支配されてゐた。

其處へ「長崎のお菊さん」がビールとネーブルを持つて來た。

「お待遠さま……」

彼女はかう云ひながら手早くビールの栓を抜いて、四つの瑠璃杯へ滿々と注ぎ廻つた。可愛い小兒が跳ね廻るやうに泡が浮上つた。

「諸君！ お菊さんのために健康を祝し給へ。」

柳田は唐突にかう叫んで、瑠璃杯を眼の高さに差上げた。石滿を始め山縣も松井も

素速くそれに倣つた。そうして琥珀色に光り輝く液體を、威勢よく各自の咽喉へ送り込んだ。

一氣にそれを飲み干して了ふと石滿は

「柳の奴め！ お菊さんに氣があるな……」と柳田の肩を叩いた。

「さうかも知れん——」

山縣は笑ひながら瑠璃杯を卓子へ下した。

「長崎のお菊さん」は怪訝な顔をしながら、更にビールを注いだ。彼女の繊細な指には、蜥蜴色に光るアレキサンダーライト入の指環が、女の面影を映してゐた。彼女は自分の顔が話題に上つてゐることが嬉れしやうに、或る勝誇つたやうな表情をしてゐた。

石滿を始め三人は、歡樂其のものを飲むやうに立續けにビールを飲んだ。——酒に弱い松井は、すぐ赤くなつて了つた。

彼は、此家の空氣に魅了されたやうに醉眼を朦朧とさせた。その胸には快樂が雲雀

のやうに悦びの讚美を上げてゐるらしかつた。

それを見ると菊の花模様の女が近寄つて来て、松井の固く結んだ唇を押分けて煙草を銜へさせた。さうして燐寸を擦つて火を點けてやつた。女の香料がやんわりと彼の感覺を包んだ。

◎

外人の一團は、男と女誰一人として首垂れてゐる者はなかつた。皆一様に、青春の坩堝の中で煮られて、魂も肉體も躍動してゐるやうな表情をしてゐた。さうして五月の空のやうに晴れやかな笑聲が、淡桃色の波紋を描いてシャンデリヤの光を揺り動かした。

「妾、この人の顔好きだわ」と云つて、緋牡丹模様の友禪縮緬の女は、寫眞のシーザーのやうな顔をした筋骨の逞しい西洋人に獅嚙み附いてゐた。



恰度、檻の中の獅子が一片の肉塊を弄ぶやうな、或る一種の凄壯な氣分を織出してゐた。

彼女等の身體は、頹れかゝつた肉を盛つてゐる割合には肥滿して弾力性に富んだ皮膚をしてゐた。さうして其の唇に接吻をしたならば唇は、赤い血潮が濁染むかと思はれるばかりの生々しさをを見せてゐた。

松井は、何時の間にか混血兒を引張り出して舞踏を始めてゐた。蓄音機のフオツクストロツトが黄色い曲を奏で、二人の四肢は妙な不規則な曲線を描いてタンゴ踊りのやうな纏れを見せた。

舞踏が高調して來ると、睫毛の長い潤味を持つた混血兒らしい瞳が、妖女の姿を宿して、松井の肉體は一掴みに鷲掴みにされて居るやうに思はれた。

①  
いつしか石滿の姿も混血兒の姿も見えなかつた。……たゞ狂態の限りを盡す外人等

が、若さを葬る女の棺を擔ふ醜い人夫共のやうに、酔泥れてゐた。

本牧の夜は蓮華の花が散るやうに紅く寂しく更けて行つた。

## 小さし、されど佳し

何と云ふ小さい家だらう。

私の家の前を通つて、私の家の表札を見て行く者は必ず左様云ふて通る。

『他見男さんともあるものが。』

思はず斯慶事も口から出して通り過ぎる者もある。私は泰然自若と構へてゐる。或時は笑つてゐる。或時は黙つてゐる。云ひたい者には何んでも云はしておけ。

一體、私程家に親しまないものは殆んど居ないだらう。今日まで嘗て全一日家にゐたと云ふことは殆んど五六年この方一度もない。必ず一度は何うあつても外へ出

る。私は去年家で晝飯を喰つたのが二度、晩飯は十一度位であらう。つまり三百六十五日のうち、晝と晩と合せて、十八度しか家で喰べないのだ。だから家では寧ろ喰べることを不思議に思ふてゐる。その喰べるのも定まつた時間に喰べるのぢやない。時には夜の十一時頃云ひ出すこともある。だから眼を廻はして家の中が混雑つて大騒ぎする。そんな時用意でもしてなかつた日には、短氣な私は天を仰いで怒號する。従前はワイフの前に小さくなつてゐるけれど、此の頃は少々威張つてゐる、いつ迄も敷かれてゐる様な男と男が違つて云ふてメートルを上げる時もある。

私の最も悪い性分として、『今日は御飯は？』と外へ出る時訊かれた時、殆んど九分九厘まで『解らない』と答へる。全で雲を掴む様な返事だ。矢つ張りいつもの通り外で喰べて来るんだらうと總かり安心してゐる所へ、ヒョツクリ歸ることがある。用意萬端おさく／＼怠りない時に、いつ迄も歸らないで、手古すらすることがよくある。家で豫想して今日は歸つて来るだらうと思ふ時歸らないで、今日は外だと思ひ込んで

時、歸るんだから始末が悪い。

或時には『今日は外で必ず喰べて来て下さい』と云はれる。承知したと出る。何かの都合で急に歸る。無い、叱る。『だつて約束ぢやありませんか』と御飯櫃を逆さまにして見せる。カーツとなつて、妻としての任務が其れで済むかツと眼玉を仁木彈正にする。かるが故に家では何日でも喰べられる様に近頃では必ず用意をしておく。若し喰べなかつたら、翌朝その儘テーブルに並べてゐる。だから朝の食卓は何日でも山海の珍味で堆高くなつてゐる。

全で漁師の家みたいだ。母から聞いたんだけど、漁師の家は朝が一番御馳走がある相だ。何故かと云ふと、船を海洋に乗り出すので、いつ何麼目に遭ふて死んで了ふかも知れない。それで首途として勇ましく賑かに送り出すが爲めだと云ふ。それとほど朝は賑かだ。

一體それなら何處に其麼に行く所があるかと云へば、それは自分ながら其の日の行

動が解らない。夢遊病者の如くフラ／＼してゐる。

決して豫定の如く行動してゐない。今西にあるかと思へば東にゐる。銀座で姿を見  
たかと思へば大森にゐることがある。それは本の材料を得るが爲めかと云へば左様で  
もない。左様ではないけど、百の見聞が何日か筆の上に見はれてゐる。材料として飛  
び歩いてゐるのでなくして、たゞ漠然として遊んでゐるんだが、いざと云ふ時、それ  
等は皆役に立つのだから、あながち呆れ返つて貰ふにも及ばないのだ。或る千萬圓長  
者が僕に斯座事を云ふた。「僕の富を以つてしても、君の自由には協はない。君ほど世  
の中で思ふ通りの行動の出来る者は稀だよ」とツク／＼羨しがつたことがある。それ  
程私は心の儘に動いてゐる。

従つて、家にゐることが少ない。だから家なんか何處家でもないものだ。或る私を最  
もよく知る友人は斯う云ふた。「君の家の應接室はホテルにあるだらう」と皮肉つた。  
その意味は君は始終そんな所へ出入りしてゐるから、家の必要を認めないんだと、如





何に外によく出てゐるかを諷刺した。名言だと思ふ。それに私は私ほど構はず屋も少ないだらうと考へる。藝術家氣取りなど云はれると、横腹が痛くなるが、一體私は無頓着過ぎる程無頓着だ。靴は磨いて呉れなかつたら、十日でも二十日でも知らん顔をし、洋服の塵や泥土は自然に落つるか、拂つて呉れるまではほつばらしにして置く。それ程の無精者が此の上家のことに一々兎や角頭を惱ましてゐたら、私に今日まで何十冊と云ふ本が何うして出来てゐよう。又何うして認められてゐよう。成功は精力を一つのものに集中することに依つて得られることを思へば、私をして本を書くこと以外、外に顧慮するものを與へては欲しくないのだ。

これだけ云つておいて、楮本論に入る。

何故、私は殆んど長年月に渡つて、他人の嗤笑をも平氣で、此の小さい家にゐるか  
と云ふと先づ第一が斯うだ。嘗て飛ぶ鳥を落さん許りの勢力のあつた政友會總裁であ  
り且つ一國の宰相であつた原敬さんが、ズツと以前に芝公園の中に小さい家を買つ

た。それは未だ原さんの小身時代であつた。所が漸次功を成して日本一の権力者となつて、國の重責を其の身に負ふ様になつた。各大臣は進言した。『あんたは何んちう小さい家に住んでゐる。あれでは狭くて入れない、寧ろ面目に關する。宜しく邸宅を新たにすべし』その度に原さんは靜かに答へた。『成程己れは今總理大臣として此の家は狭かる。然し野に下つたら浪人ぢや。浪人の家には之れで澤山ぢや』と頑として聽き入れなかつた。斯くする裡、不幸にも兎刃に倒れた。今度は未亡人達は、其の家が廣くて困り、直ぐ其れを賣り拂つたと人傳てに聞いたが、私は此の原さんの言葉が常に私に教訓を與へてゐたのだ。何故かと云ふと、今日の私としては實際、世の中に拍して得てゐる名聲と較べて家の小さいこと百も二百も承知の上だ。それを承知してゐて且つチーツとしてゐる所以は、文人ほど盛衰の烈しいものは無いから、若し其の盛衰で家を大小にして行つたなら、大きな家へ入るはいゝが、楮一旦大きな家へ入つた者が、今度は衰へたからと云ふて、急に小さい家へ入つた場合には、其の時に受ける心

の痛手はどんなに重いであらう。自分と云ふ影をどんなに悲惨に、淋しく見返へることか。原さんの様な偉人だつて、宰相から浪人になつた時を考へたではないか。況んや吹けは飛ぶ様な我々はよく、此の點を沈思しなくちやならないのだ。

だから私は其の悲惨さを見たくなさに、最小限度の家に住まつてゐる。いかに衰へるとも之れ以上小さい家に住むことは出来ないのだ。家族は又そこに緊張を見せ、辛苦の鍛錬が平生から修養されてゐるから、ビクともせぬ。己れがいつコロリと参つても、『やられましたね』位で笑つて済む。まさか笑ひもすまいが、其の爲めに家に動搖を來たすことが少ない。斯う云ふ深甚なる精神の伏在から、私は此の家に満足の意を表してゐる次第であります。冷評し過ぎ行く者よ、御諒承あれ。

●猶、今一つ御諒承あつて欲しい。年寄と云ふ者は兎角縁喜を擔ぐものだ、かるが故に私の母も縁喜を擔ぐ。その母の曰はく『お前は此の家へ來て、出世したんだから、たとへ孰麼に不自由でも我慢して、出世の家を離れてはならぬぞよ。家貧くとも心に

恒産あるぞよ、貯金が増へるぞよ。楽しみぞよ、ゆめ移轉つてはならぬぞよ」と、祝詞めいた其の訓戒の辭には母の體驗と信心が籠つてゐることを、なほざりにしてはならぬ。子を思ふ親に安らかさを與へる爲めにも、私は容易に此處を動かれないのだ。

更に猶一つ云ひたいことは、無精ではあるが私は住み馴れし家と云ふもの、土地と云ふものに、云ふに云はれぬ親しみと執着を感じる。よく他人で、移轉り歩くことに興味を覺えて一年に二度も三度も引越しをする者があるが、私にはあゝ云ふ氣持ちには何うしてもなれない。『愛する』と云ふ人間の本能の力の美しさ優しさが私には殊に深い様に思はれてならない。殊に日出子生れ、靜子の育まれた家だ。他人の冷笑如何に降り灑ぐとも、我等が血の爲めに小なりとも動いてはならぬ。移轉つてはならぬ。西大久保九十一番地の一角は他見男家の爲めに守らねばならぬ。

家主は今日まで既に五回の値上をした。私は唯々として受けた。守つてゐるのだ。家主は又次第に過重なる條件の承諾を求めた。私は黙々として受けた。守つてゐる

のだ。

守つて守つて守つて守つてるのだ、私は。

### 松竹歌劇の人々

久々で野原に逢つた。彼は此の己れの顔が何よりも楽しみだと、全で葡萄酒見たいなことを云ふ。己れと話合つてゐると、自から身心の爽快を覚え、知らず識らず恍惚となつて此處愉快なことはないと云ふ。益々己れは葡萄酒だ。彼は先日大毎東日の招待で、關西地方を遊歴してゐたので、暫らく君から遠ざかつてゐた。今日は一つ大に飲まうぢやないかと云ふて、銀座のキリンビールへ案内した。あのピヤホール丈は女人禁制と云ふてもいゝ位、男ばかりで各卓子が充満してゐる。恰度一週間に一度の黒ビールデーであつたので、それが呼び物とあつて、溢れる様な客だ。そこへ二



何と紋風早子やまゝか  
つんばす限り  
田カマ  
男

人は入つて行つた。一隅に坐してグイグイと煽つた。實にうまい。この味は我黨の士にあらざれば解らない。

酔ふて来ると、量見の悪くなるのは、萬有通則の法だ。我々も遺憾ながら、此の法則圏内から出ることの出来ない憐れなる者共であつた。

『何と殺風景ぢやないか。見渡す限り男又男だ。』

彼はそろ／＼地金を現はした。

『まさか此處所へ女がビールを飲みに来られないぢやないか。却つて斯う云ふ所が、男性的で勇敢だよ。』

『君は近頃戦場にでも出てゐる様に、直ぐ勇敢々と云ふねえ。怪漢ローの活動でも見たナ。』

急所を突かれて、己れはグツとした。成程近頃の己れつたら活動に夢中だ。

『そんな言葉は此の際發言せぬことを以つて我々の有利となすよ。ま、今日は何も云

ふナ、そして君の身體は僕に任せろ。決して悪い様には取扱はぬ。』

よく其處ことが云へるものだ。萬有通則の辯に。

『ま、出よう、出た上で』と、私は外へ出て、暫らく風に吹かれたら、彼の酔ひも醒め、君の身體を僕に任せろ所か、『君、電車に乗らう、然して歸るとしやう』と、殊勝な心掛けになるだらうと、己れは風よ吹け吹け、酔ひ醒せと許り、彼を善良なる君子たらしむる可く『いざ立ちたまへ、吹かれたまへ』と、彼の手を執らん許りにして外へ出た。

銀座の左側を七八間歩いて行つた時、己れの眼はハタと前方の者に集中された。おれは咄嗟の姿に餘りに驚かされたのであつた。前から来る女性の人々は、己れが大阪で二三回逢つた松竹の歌劇學校生徒ではないか。先方でも私を見て奇しき對面に、驚喜して、足を早めて、互の距離を近づけた。

『まア先生暫らく。』

名は忘れたけど、洋服の上に、軽いマントを着た年嵩のが、斯う云ふて挨拶した。續いて飛鳥明子と云ふ藝名を以つた、今松竹で第一の花形である松田嬢が、嬉し相にニツと笑んで側に立つた。野原君は之を見るや大に羞恥と羨望を感じて傍らの飾窓の前に立つて形勢を觀望し、女の中の三人の一人——それは未だ私の知らぬ少女の顔であつた——は洋服と松田さんを距つること一間、柳の下に足を止めて此方を見ているた。

『いつから始めるの？』

私は松竹の歌劇が今度始めて歌舞伎座で上演すると云ふことを新聞で見て、あの連中の顔は殆んど見知つてゐるから、従つて其の劇を観ることも普通の人と違つた意味での興味を覺えてゐたので、是非行かうと思ひ構へてゐたのだ。

『もう済みましたよ。昨日と一昨日で。』

『おや、左様ですか。』

己れは少くも一週間はあるものと想像してゐたのに、二日間とは餘りに呆氣ない。

而かも其れが最早終つて了つたとは千秋の恨事である。私はまだ彼女等の實演を一度も見たことが無かつたんだから、一入、惜しまれてならなかつた。

『失策つたナ。こんな事なら、もう少し注意して新聞を見ておけばよかつた』と、後悔して、『いつ頃まで居るんですか』と、訊いた。

『今晚立ちます。本當にもう少し早くお目にかゝれば宜うござんしたわ。そして彼方此方御案内して貰へば、どんなに嬉しかつたでせう。銀座をたゞブラン／＼行つたり來たりする丈で、何處へても出ませんでしたのよ。詰らなかつたわ。』

『そりや残念でした。私が知つてゐたら』と、大に頼むに足る所があつたんだと、云はぬ許りに聳え返り、

『宿は何處？』

『築地です。』

『江川君來てゐますか？』

『江川先生ですか。ゐらつしやいますわ。』

江川君は舞踊の先生である。彼は天才的な其の方の才能の持主であつて、生徒から非常な尊敬を拂はれてゐる。眞面目な裡に諧謔的な氣分を含んだ面白い男だ。いつか行つた時も或る生徒が私に『江川先生は本當に頭腦が良いんですよ。外國の雜誌を見てゐて、直ぐ其れを巧みに自分の考案の資料になさるんですもの。絶えず進歩的だから、學び甲斐があつてよ、』と大に推讃の辭を捧げてゐた。私は江川君に此の事を云ふて聽かせたら、眼の周圍を大波小波させて喜ぶだらうと思ふて待ち構へてゐたんだが、その後機を得ず一度も逢はないで居るんだ。

『江川君に、どうぞ宜しく。』

『ええ。でも先生、又近くに大阪へゐらして頂戴ね。お待ちしてゐるわ。』

總ての場合に於て無口な明子さんは、此の時『屹度どうぞ』と、洋装君に續いて念



を入れた。私はもう少し話してゐたかつたんだけど、野原君がさぞアツ／＼云つてゐるだらうと、『では左様なら』と云ふた。彼女等の眼には惜別の情が、なつかし味を湛へて、私への最後を色彩せてゐた。

私はあの明子さんが好きだ。如何にも寂しい静かな、何處となくリリアンギツシユと、よく似た所があつた。リリアンギツシユを好きな私に、彼女を好くのは當然のことであつた。大阪の諸君よ、どうか彼女に日本リリアン・ギツシユと綽名してくれ。そして彼女の美しい姿が舞臺に出た時、『いようリリアン・ギツシユ』と叫んでおくれ。

『おい、どうもお待たせ致しました。』

野原君に『様云ふて近づくと。』

『僕は茲にあつて大に美を賞玩してゐたよ。どれも之も實に美人だね。一體何んだい？』

『ありや君、大阪の松竹の歌劇連中だよ。』

『ホツ、僕は又ハイカラな女學生だと思ふてゐたよ。まるで女學生ぢやないか。』

『生徒だもの。』

『女優ぢやないか。』

『女優など云ふと、そりや厭がるから、どこ迄も生徒と呼んで敬意を拂つて置くんだよ、君は處世術が拙手で不可ん。アーン。所で二人のうち孰方が好きだ？』

『勿論洋装の方だよ。』

此奴まだ活動を見ないとみえる。リリアン・ギツシユを知らんと見える。

『己れは袴姿の方だよ』と、明子さんに手を上げた。

『ホウ、人の趣味と云ふものは千變萬化だねえ』と、驚いて、

『時に君は一體氣が利かかねえ』と、大に輕侮の眼を向ける。

『どうしたと云ふのだ』と、一寸キツとなる。

「だつて左様ぢやないか。折角遠方から来た可愛い連中に逢つたんだから。何處か喫茶店へ連れて行つて、御馳走するのが當り前だよ。人情の然らしむる所だよ。そこで此の友人はと僕を紹介する。僕は名刺を出す、今後宜しくと眼を細くする。談話に於てか大に佳境に入るぢやないか。」

「あゝ左様だつた。我れ過まてり、過まてり、成程折角逢つたんだ。何故どこか綺麗な所へ案内しなかつたんだらう。そうだ君が待つてゐるので、気が氣でなく早く切り上げようと、考へを其處まで及ぼす餘裕がなかつたんだよ。」

「君にも似合はしからんぢやないか。」

「以後注意します。」

「以後注意すると云ふても、大阪まで行かなければ再び逢へないんだよ。どうだ今から後を追つかけて……」

「紳士として其眞似は出来ぬよ。」

「君は確かに今日は何うかしてゐる。」

野原こそ何うかしてゐる。

「あゝ云ふ美人と膝を交へて語るとは、人世何ものか之に過ぎざらん、オーイ左様だろ？」

野原め、まだ酔つてゐる。

「ま、そんな事云はないで歩かう。」

斯う云ふて私は「風よ吹け吹け酔醒せ」と口の中で吟びながら、彼の右手を抱へる様にして、宵の銀座の人込みの中を押されて行つた。

## 地主廢業の記

或る土地會社が去年國分寺に地所を賣出した。旨い廣告文に釣られた譯ぢやないが、



かねてから何處かに安い地所の賣地がないかと物色してゐた私は幸ひ其の會社の社長や又部長などゝ懇意であつたので、試みに説明を訊いて見ると、土地位いゝものは無い。焼ける心配もなければ年と共に値が上る許りだ。買ふなら地所でごわすと巧みに説かれて、成程如何にも左様に違ひない、とすぐ共鳴して了つて、五百坪と云ふ坪を申込んだ。すると直ちに集金人が遣つて来て、證據金の何千圓を下さいと云ふ。よしてきたと其の場で渡して遣つた。私は生れて始めて少ないながらも地面の持ち主、つまり、地主様になつたのだから嬉しくて、人の顔さへ見れば、「君、僕は國分寺に五百坪買ったよ。あんな有望な所はありやしない。將來あがるぞ。君も買つて置いた方がいいぞ」と、全て土地會社から頼まれた程に有頂點になつて喜び廻はつてゐた。

其の有頂天さを躍氣になつて本氣に聞いたのは石原君である。石原君は「さうか、そんなに國分寺が有望ならドレ僕も一つ」と、一日妻君を連れて國分寺から吉祥寺へと物色の眼をさらして歩いた。その時は偶然自動車で、性質のいゝ地主と同乗しその



地主の勧めに依つて小金井の小高い所を、十圓五十錢で何百坪と買つて、「おれも地主だぞ」と、肩をそびやかした。僕も我が黨の士が増えたので、大に喜んだ。近き將來は成金だぞなどと話合つては興に入つてゐた。

所が其れから二ヶ月ほど経つてから又石原君に逢つた所「君のお蔭であの地所を十五圓五十錢で買ひたいと云ふ者が出て來たよ。でも僕は賣らないんだ」と、ホクホクして見せた。

「ホウ、そりやいゝことをしたね。左様だらう僕はいゝことを勧めたらう」と、威張つて見せて、どりや、この調子ぢや僕の買つた土地も大分値が出たに違ひないと早速會社に友人の部長を尋ねて、

「オイ、國分寺の地所の値が出たかい？」と、訊くと、

「そんな氣の早い奴があるものか。十年も待つ氣でゐなくちや。」  
「それぢや、まだ少つとも上らないのか。」

「さうさ、買つた許りぢやないか。」

「フーン」と、おれは悲痛な顔をして戻つた。そして靜かに考へて見た。若し僕の買つた地面が有望の地であつたのなら、石原君よりかズツと先きに買つたんだから、相當に上つてゐなくちやならない筈だ。それが上がらぬ所を見ると何うもあの場所が悪いんぢやないか知ら。場所さへよかつたら幾分でも上がつてゐる筈だ。

大體土地會社では近くステーションが出来る豫定だと云ふことであつた。ステーションさへ出来れば一躍五十圓ですよと吹聴されて成程と云ふたんだ。忘れぬ先きに替くが僕は一坪十圓で買つたのだ。ところが其の後又聴くと政府で緊縮の爲めに當分ステーションが出来ないかも知れぬと云ふ心細いことを土地會社で云ひ出した。おれは益々あの土地が何んだか見込のない様な氣が仕出して來た。

そこへ持つて來て、誰かと國分寺の方面は少つとも發展する所ぢやないよ。それよわか株でも買つて見たまへ。利殖としては孰麼に利巧な方法かも知れない。土地と云

ふものは買ふ時にはすぐ買へるが、さて賣らうとすると、却々賣れるものぢやない。それは土地を持つたものでなくちや解らないなど、注意して呉れた。

さう云へば今は殆んど株の値がウンと下がつてゐるのみならず、賣らうと思へば何時でも賣れるし、將來又世の中に景氣が出て來た時どんなに値が吹き出すかも知れぬ。その時ボンと賣つて現金に代へた方が土地を持つて賣れるか賣れないかと心配してゐるよりか遙かに賢明なる方法だ。

左様思ふと、私は一刻も早く手離したくなつた。一體僕は生れつき非常な氣の短かい性分だから、土地を持つてヂツと値の出るまで形勢を觀望してゐようなどと云ふ柄でない。柄でないことはするものぢや無いものである。幸ひ其の土地會社では、取消しに應じて、證據金を返すと云ふから、早速電話であの事を中止するから、其の積りでと云ふと、それぢや證據金の受取書を持つて來いと云ふから明日それを持參する積りである。屹度放したら、さア放さなけりや良かつたと後悔するかも知れぬが、ど

うも私の性分として此の舉に出るのは止むを得ない。一層それ丈けの金を土地を持つたとして、株がもう少し下がつた頃を見計らひ株に代へる積りである。

一體、郊外々と云ふが郊外も考へものである。それは私の隣人が最近組合住宅を組織して西荻窪に地面を借り、家を建てた。所が一昨日來ての話に依ると、あゝ移轉るんぢやなかつた。移轉るんぢやなかつたと後悔し切つてゐる。何故？ と訊くと、第一その不便つたら、雨でも降つて御らうじろ。いつまで立つても道は泥でヌカ／＼なり、その上又物價の高いといつたら。萬事につけて嫌氣のさすこと許りだと云ふ。ちよつとお菓子を喰べたいなと思ふても、菓子屋十町、肴屋六町ちや泣きたくなると零し抜いて、いくら家賃が高くて、郊外から毎日高い電車賃を出して乗るよりか市内がどんなに經濟かも知れない。ツク／＼郊外は凝り／＼だ。第一子供が病氣になつて、それ醫者だと呼びに行くにも日暮れて道は遠し、それに碌な醫者はゐないし、それだと云ふて醫者を東京から呼べば眼玉の飛び出る様な高い往診料を吹つかけられた

上、自動車賃として莫大な金をセシメラレ、おまけに入院なすつた方が安上りでせうと入院をすゝめられるが、その入院料が又並大抵ぢやない。郊外住人の一番困るのは病人が出来た場合だ、とは成程と領づかせる。その人は何故あんな組合など起して、この便利な所から去つたんだらうと、大に輕學を認め、重ねて此の眞似しなさんなど忠告して呉れた。斯う云ふことを聞くにも附け、あの國分寺の地所を明日離すことは悪いことでない様な気がする。外から見れば如何にも優雅な文化住宅らしく見えても、中にあつて皆不快を啣つてゐると思へば持つ可からざるものは郊外住宅ではないか。

### 本能ですもの!!

妻の妹が今度女學校を優等で卒業した。更に高等の學校に十人一人の選抜にて、それにも合格して入學した。その爲めか久振り得意氣揚々として家へ訪ねて來た。その



時雜誌の末、

『女學校にゐる時、結婚に就いて、友達同志が話合ふことがあるかと、訊くと、

『そりやありますわ、だつて年頃ですもの』と云ふ。

『結婚の第一條件として、何を冀ふか知ら。』と、重ねて訊くと、

『矢つ張り、男の容色が第一だわ』とある。

『ウヌレ、男の縹緞が第一の希望とは』と、つめ寄ると、

『だつて、そりや本能ですもの!!』

オーイ、世の中油斷がならんぞーツ。

## 新婚家庭羨し記

常富醫學士が今度素敵な美人と結婚したから是非拜觀に來ないかと云ふ。あゝ見ざる可からず、行かざる可からず。

日曜だ、曇りだ、屹度家にゐるに違ひない。かれ等はこそく〜と話し合つては、ウフ、オホホと何をしてゐるか解らない。愈々以つて進めや進め一二二三。

省線を目黒で下りた。恰度ツイ近くに光屋君と云ふ古い友人があるので、試みに立寄つて見ると、神妙に家に罷り在つた。『夫婦で散歩に出かけてゐると思ふたら』と云ふと、『空を見よ、地を見よ』と云ふた。己れは空を見た、降らん哉だ、成程。地を見た。泥刎ねん哉だ、成程。

そこで一時間ばかり話をした。明後日から二三日一寸故郷へ歸ると云ふ。何の爲め

だと訊くと、我々は東京で結婚したので、まだ故郷の親類連中が、嫁の顔がどんな形してゐるかを知らんから、見せに行くんだと云ふ。この縹緞なら謹んで隨喜の涙を流すに違ひないよと、妻君を傍らに置いて云ふて遣ると、妻の君、「まア」と嬉し相にして、俄かに立上がり、洋菓子を山盛りにして『どうぞ』と云ふた。即ち口にし、即ち左様ならと立上つた。

電車道へ來たら、電車と自動車と一緒に來た。自動車の方が少し早いと思ふたので、飛び乗らうとした。所が平生電車に飛び馴れてゐる故が、自動車の踏段が高かつた爲め見事に己れは踏み外した。今スンのことにスツテンコロリンをする危険が突發した。己れはヨロヨロツと倒れかゝつた。運転手は驚いてピタリと止めた。もう二秒遅かつたら、己れは其の儘病院へ運ばれて、片足位は切断されてゐたかも知れなかつた。己れは助かつた。助かつた代りに、全身泥を刎ね上げて了つた。その無慘なる有様は、己れは諸行無情の鐘の音を聽いてゐる様な氣持ちになつて、氣極りの悪い赤い顔をし

ながら、小さく隅に腰を下ろした。俄かに空を見よ、地を見よを繰り返へしたけど、遅かつた。

新婚醫學士の家へ訪ねて行くと、ピタリと門が締まつてゐる。雨戸も之と類を同じゆしてゐた。あゝ天は泥に組せすか、とつらく浮世を叩ちつゝ、石を投げられた野良犬みたいな顔をして、悄々足を引きずる様にして倉水君を訪ねて行つた。倉水君は僕の姿を見て驚いて、

『どうしたんだい。實に敗軍の將よりも淺間しい姿だねえ。轉んだのか。』

『轉ばんとして、踏み止まつた奮闘の姿だよ』すると、彼は『僕ならばこそ其の醜い姿を喜び迎へるんだよ。さ入れ』友情大に厚い。『では靴を脱ぐと、』

『オイ二階へ上れよ』と、倉水君が階段の半ばにあつて云ふ。『よしッ』と應じながら、その時出て來た奥様に『奥様と倉水君とは美しきロマンスの夫婦だけあつて、成程あなたは美人ですねえ』と浴せかけると、倉水君慌てゝ、『オイ餘計なことを云ふな』

よ。早く上れ、上れ。十二の子供を頭に二人もるる夫婦を捉へて今更何た。上れ、上れ。』

氣極りが悪いと見えて、矢鱈無精に上れ、上れと云ふ。凧だと思ふてゐるらしい。二階で色々日本最近の風潮を物語ると云ふ大人物を出現させた後、談偶々新婚醫學士のことに及ぶと、倉水君その名を聞いて吃驚して、『世間は廣い様で實に狭いものだねえ。その花嫁と云ふのは、ツイ最近まで僕の家裏隣りにゐた娘さんで、而かも毎日の様に家の妻と遊んでゐたんだ』と云ふ。

『婚段は美人だと大に威張つてゐるよ』と、吹聴すると、

『誰でも貰ひたては皆美人に見えるものだ。僕だつて左様だ。況んや君に於ておやだ。どうだ蓋し偽はらざるの記だらう？』こりや、上手いことを云ふ哩

そこへ妻君が上つて来て、その話を聞き、何かの用事で階下へ下り、再び上がつて来た時に、『恰度今し方、娘さんの實家の妹さんが通りましたので、斯々したお客様が



家に待つてゐますと知らせたら、慌てゝ歸つて行きましたよ。何んでも新夫婦二人が娘の里へ遊びに行つてゐらつしやるんですつて!! だから直ぐ戻つて来るでせうよ。』何が僥倖になるか解らないものだ、己れは倉水君の家へ寄つたことが、無駄足にならなかつたと喜んだ。又、妻君が上つて来た。

『只今、花嫁さんが大急ぎで、新宅へ歸つて行きましたよ』と、知らせて呉れた。それぢや訪ねて行つても、もう大丈夫だ。

『ぢや出かけるとしやうか』と、立上ると『ウン待て待て君を上等にして遣るから』とブラシを持つて来て、火鉢で乾かした泥を跡方なく落し、

『オウこれでよし、いざ新家庭訪問の使命を全うせよ』と、ボンと肩を叩いた。妻君は妻君で膝にぢり進ませて、『ウンと冷評かしてお遣りなさいよ。澁かろか知らねど柿の初契の家庭ですからねえ』と、この妻君、加賀の俳女千代尼が始めてお嫁入りした時の俳句を引例して、激勵の辭に代へた。

出ようとすると、長男が學校から歸つて来た。その顔を見るや否や、『こりや親父を凌ぐ才能を持つてゐるぞ』と、賞めて遣ると、『君は不思議な洞察力を持つてゐるねえ。如何にも此の子は學校の成績が何日も一番だよ。どうして解る?』と奇なり妙なりと云ふ顔をする。

『お互に思ひを我子に致す程の年齢になつてはねえ』と、感慨無量を交換して、己れは左様ならをした。

常富の家の前へ來ると、恰度花嫁が中から出て来て、門の鍵を外した所であつた。己れは一寸モジ／＼してゐると、早くも此方の姿を見てにつこりする。スーツと開いて淑やかに御辭儀した。もう倉水君の妻君から私が來てゐると云ふことを聽いてゐたから、名を訊く迄もなかつた。

『どうぞお入り下さいまし』斯う云つて始めて私の視線とバツタリ出合つた。『まあ此の人がアノ』と先方が思ふたと同時に、此方も『まあ此の人が』と思ふた。常富はあ



の眼に參つたんだナと第一の印象がピカツと掠めた。如何にも大きな、如何にも美しい眸だ。彼女の全生命が眸に集まつてゐるかの様に、際立つて私に寫つた。成程花嫁だ。まだお嬢さん型その儘だ。頸から顔へかけて、白粉がスーツと塗られてあつた。荒い銘仙の其の着物は彼女の若さを充分に語り包んでゐた。

「倉富君、ゐますか。」私は彼女を見ながら、遂に最初の口を利いた。

「ハイ、いゝえ、ハイ、どうぞ。」花嫁の君、しどろもどろだ、如何に頭腦鋭敏なりと雖もこれぢや居るか居ないのか解らない。依つて再び我が唇は動いた。

「居るんですか、居ないんですか」をだやかに訊いた。

「只今、直ぐ戻つて來ますから、どうぞ。」

「奥様だけ一足先きにお歸りになつたと云ふ譯ですね」と、始めて「奥様」と呼んで遣つた。その時どんな顔するかと細心に見詰めてゐたが、泰然自若として「ハイ左様で御座います」と、受けた。最早花嫁たる修養が積んで、こんな事で赤い顔はせぬも

の見える。己は花嫁さへ見れば、外に用事がないから「もう歸る」と突然踵を廻らした。驚いたのは花嫁だ。「いいま直ぐ戻りますから。」

「いゝや別に常富君に逢ふ必要が無いんです。たゞ貴女の顔さへ拜觀すれば、我が任務終れりですから。常富君は愛しますか、將又敬しますか。生涯の裡こんな嬉しいことは始めてですか。成程結婚は人世の花と思ひましたか」と、續けさまに連發して、「ちや、どうぞ宜しく」と引返へ相とした。

「それでは今度は私の任務に支障があります、あのウたくが歸ると吐りますから。」

「たく、たく、佳い哉たく。奥様はもうたくと發音しますねえ。」

「だつて、だつて、まア氣極りの悪い」と、此の時稍ほんのりを呈す。美觀なり。

「いゝや、矢つ張り歸ります。たくさんが戻つて來たら、如何にも花嫁さんは御言葉の通り、得難い美人だと云ひ残して行つたと告げて下さい。」

「あら、まア羞かしい。でも、今歸つて來るんですもの」と、茲を千途と引留める。

『ではまあ此處をあけて下さい』と、私は庭戸を指さした、『ヤレうれしや』と任務の君は急いで座敷へ廻つて、下駄を引掛けるが早いか、鍵を外して、『では、どうぞ』とホツとした。私は其の儘縁側に來て腰を下ろすと、『どうぞ座敷へ入つて下さい』と、再三勧めたけど、そればかりは承知しなかつた。外の家庭なら、云はなくても靴を脱ぐんだけど、此の家は貰つた許りだ。花嫁可愛い眞盛りだ。自分以外の男一匹と話合つても、『おのれツ』と腹の立つ時だ。況んや座敷に通つて對座してゐる所を見たら花婿は爾來快々として樂しまんに定まつてゐる。己れは新家庭永劫を壽ぐ爲めにも、縁側に頑張つてゐる、何時見られても『この通り靴を履いてゐる程公明正大だからねえ』と、花婿安心せよと許り、俯仰天地に羞ない所をお目にかけて遣るのだ。さすれば今夜も明晩も、花婿の口から『可愛いのはお前だけだ』が、絶えないであらう。この精神流石はと思へ。

『何うしてまだ戻つて來ないんですか。』



「只今、里で皆に豫防注射をしてましたから。」

成程、さうして娘の花婿の有難さを示しておけば、常に彼は大手を振つて里に出入が出来ると云ふものだ。然し注射でおべんちやらとは痛いおべんちやらもあるものだと、一寸腹を抱へた。そこへヒヨツクリ常富君が戻つて来た。

「やアよくこそ。オヤ何うして上らないんだ。」

「上つてゐなかつたから、嬉しいだろ？」

「オヤ何うして。友達方より来たる又上り給はずやだ。さア何を遠慮してゐるのだ。靴を脱げ、脱げ。」

「ウン、君の顔を見た上は御意の儘になる。この上は可愛がつてやれよ、どつこいしよ、ウーン」と、靴を脱いで入つた。

「馬鹿に遠慮深い性だねえ。君はそんな性ぢやなかつた筈だが。」

「君、學問の爲めに教へておくが、凡そ新婚の家庭を訪問して、その家のたくが不在

であつた場合には必ず靴を脱いではいけませんよ。」

「どうして？」それが愛への道だ。「愛への道？ 解らないねえ。」

「君は結婚してから少し頭腦が呆然したねえ。餘り刻苦勉強するなよ。抑々愛への道とは」と、滔々と説明して遣ると、彼は聽き終つてから、

「惴りながら、己れは假令己れの不在中であつても、其慶事は少つとも構はん、何故ならば其慶事を疑ふ様な素質の有る者は貰はないよ。凡そ嫁を貰はんとする者は豫め其の選擇が必要だ。今更何すれぞそれ妬く可き、何すれぞそれ……」と逆襲だ。

「わ、解つた。君の量見頼もしい。」

「だから上つて、大に妻と知識を交換すれば良かったのに。妻はあれで學古今に通じてゐるよ。萬葉集を暗記してゐる。ゲーテの作は朗々と口を突いて出る。」

「して見ると君は全て字引と結婚した様なものだね、大に恐れを爲さんかい？」

「そこは夫婦の妙味だ。嫁は何も知らん氣に慎しみ深い。奥床しいと思はんか。」

『思ふ、思ふ、もう助けてくれー』己れは平伏した。

『時に有難う。君から貰つた煙草入の一揃ひは此の通り、永久に記念する爲めに備へ付けてあるぞ』と、テーブルの眞中を指して見せる。

『この机も、あの筆筒も、本箱も見渡す限り皆貰つたんだ。』

『して見ると君は全て貰ひもので、人世を形成したんだね。花嫁まで貰ひ者だからねえ。』

『斯くして春來たり、夏を迎へるのだ。結婚の光明は此の間に存するんだよ。』

己れは恐れ入つて再び平伏した。

『時に君、結婚記念の寫眞を見せて遣らうか。』

『ウン。』彼は抽出しから取出した。『どうだい？』

己れは抜いて見た。『オヤ此の寫眞では花嫁の眼の黒玉が、半分雲隠れしてゐる。結婚の樂しさを想ふの餘り一寸瞑想したと見えるね。オヤ君のお腹はペコンと引込んで

ゐるぢやないか。飯を喰はなかつたのか。』

『いゝや、その寫眞屋がお腹を曲ける曲けると云ふんだもの。全て肴の腸を出した様で、憤慨で堪らないんだよ。大に美風を害ふ氣味があるねえ。』

『確かに左様だ。これぢや仙臺萩の芝居みたいだ。奥様の方も寫眞よりか實物を以つて美となすよ。』

『ウ、さうか、え、さうか。君は胸に十字架をかけて偽りを云はないねえ。』

『さうともー おゝ在天の神よ。』

すると、常富は嬉しさの餘り、次の部屋から茶を入れて出て來た花嫁に向つて、

『お前、寫眞よりか實物がいゝとさ。』『あら、嘘だわ。』

『いゝや胸に十字架を認して本當だとさ。嬉しいか。僕かア嬉しいよ、眞に之れ嬉しいよ、さ、そのチョコレートを喰べてくれ。』

己れは感涙に咽んで、謹んでお口へ入れた。

「時に君は今花嫁にお前と云ふたね」と、質問した。

「ウン、云ふたよ。」

「己れは何うしても妻に對してお前と云へないよ。」

「ぢや君と呼ぶのか。」

「ウン。どうしてもお前と呼ぶ英斷に出られないんだよ。結婚十日にして君はお前と呼ぶのは勇敢だねえ。亭主らしい氣持ち融然として湧くを覚えるか。」

「左様でもないが、浮世の法律は良人は妻をお前と呼ぶ可く祖先傳來させてゐるから、萬止むを得んよ。」

彼は此の名言を駁して、君も家へ歸つたら、善きことは速かに學べお前お前と妻を呼べと教へた。今更氣極りが悪いや。

聽て二人は見送る可く立上つた。

己れの姿が見えなくなつてから何を仕出かすだらう？

おへその宿に泊るの記 終

昭和四年五月十八日 印刷  
昭和四年五月廿一日 發行

おへその宿に  
泊るの記

著者 西川他見男

不許  
複製

著作權所有者 東京市神田區表神保町十番地  
發行者兼印刷者 玉井清五郎

玉井清文堂印刷部行

發行所

東京神田表神保町一〇番  
電話神田二二三三三番  
振替東京三二二八番

玉井清文堂

覽天

仁文 俠武 大和 錦

冊 送 料 市 內 地 十 二 錢

刊

◎算術問題  
◎現代用語

# 玉井清文堂月報

第 二 年 第 五 號

## 思想國難と

### 淨瑠璃劇

蒙古十萬の大兵は我が國境を脅やかし  
 たに過ぎなかつた。まさに蒙古襲來は  
 一大國難には相違なかつたけれど、  
 それは單に武力に訴へる所の外寇であつ  
 た故に、我兵一たび起てば案外に譯もな  
 く追拂ふことが出來たのだが、それが若  
 し思想といふ形のない關入者によつて脅

か。然るに尙ほ識者の間には思想國難  
 の叫びを擧げて己まなひのは抑々何う  
 たといふ譯か。

それは赤化思想でも左  
 傾運動でも何でも無い、  
 國難の根本は我々固有の  
 精神に虫が喰つたことで  
 ある。やがて此の虫くひ  
 の爲に我が日本國民はそ  
 の存在を失はねば成らな  
 いであらふ。然らず虫く

第四

同 堂

# 玉井清文堂月報

第 二 年  
第 五 號

## 思想國難と

### 淨瑠璃劇

蒙古十萬の大兵は我が國境を脅やかし、たに過ぎなかつた。まさに蒙古襲來は一大國難には相違なかつたけれど、それは單に武力に訴へる所の外寇であつた故に、我兵一たび起てば案外に譯もなく追拂ふことが出來たのだが、それが若し思想といふ形のない闖入者によつて脅かされたなら、必ずや其國の土臺は揺がざるを得ないのである。古へより外敵によつて滅ぼされた國はないが、思想といふ無形の闖入者によつて覆へられた國は幾らもある一たび歴史を繰りて列國興亡の址を省みたら思ひ半ばに過ぎるであらふ。

こゝに於て思想國難の聲を聴く。併しながら思想國難は今日に始まつた譯ではない。かの佛教渡來の如きは正に一大國難では無かつたか！ 然かもそれを咀嚼し更に消化せしめて能く日本固有の思想と融和せしめた所に我が個性の卓越せる所以を知る。近くはキリスト教ですらも漸く日本化しつゝ有るではない

か。然るに尙ほ識者の間には思想國難の叫びを擧げて己まないのは抑々何うしたといふ譯か。

それは赤化思想でも左傾運動でも何でも無い、國難の根本は我々固有の精神に虫が喰つたことである。やがて此の虫くひの爲に我が日本國民はその存在を失はねば成らなうであらふ。然らば虫くひとは何か。それは犠牲的精神の忘れられた事である。この犠牲的精神こそは日本人の持つ唯一の力である。國家に對し、同胞に對し、また事業に對して献身的勇氣を失ひつゝ有ることが思想國難の中核である。

人類の美しさは犠牲的精神の外に何物もない！ その美しい精神を掴み得た藝術の一つに我が義太夫淨瑠璃のあることを忘れては成らない。義太夫が今も尙ほ持て囃されてゐるのは其の犠牲的精神に對する共鳴が然らしむるのであらふ。

第四回

配本中

- 第一回 伽羅先代萩 艶容女舞衣
- 第二回 御所櫻堀川夜討 傾城阿波の鳴門
- 第三回 菅原傳授手習鑑 近頃河原の達引

(版重—版三)

菅原傳授手習鑑 同 解 説

増補朝顔日記 同 解 説

寺小屋 竹田出雲の作「寺小屋」は總ての淨瑠璃中の最大傑作で、これ程力強い劇は數へる程しかありません。かの「忠臣藏」と寺小屋とは外國の名優が西洋の舞臺で演じてゐる位です。武士道の極致、日本國民性の結晶と云つても過言ではありませぬ。

# 月刊報

第 二 年 第 五 號

るに尙ほ識者の間には思想國難  
を擧げて己まないのは抑々何うし  
ふ譯か。

第四回

配本中

- 第一回 伽羅先代萩
- 第二回 御所櫻堀川夜討
- 第三回 管原傳授手習鑑
- 第四回 傾城阿波の鳴門
- 第五回 近頃河原の遠引

(版重—版三)

解説附 義太夫名曲全集  
稽古本

第 五 回

- 假名手本忠臣藏
- 松ノ廊下喧嘩場
- 同 解 說
- 桂川連理柵
- 同 解 說
- おはん長右衛門
- 同 解 說

本配中月五

菅原傳授手習鑑 同 解 說

増補朝顔日記 同 解 說

は赤化思想でも左  
でも何でも無い、  
根本は我々固有の  
虫が喰つたことで  
やがて此の虫くひ  
我が日本國民はそ  
を失はねば成らな  
らふ。然らば虫く  
何か。それは犠牲  
の忘れられた事  
この犠牲的精神こ  
本人の持つ唯一  
である。國家に對し、同胞に對し  
業に對して献身的勇氣を失ひつゝ、  
とが思想國難の中核である。  
の美しさは犠牲的精神の外に何物  
！ その美しい精神を掴み得た藝  
つに我が義太夫淨瑠璃のあること  
では成らない。義太夫が今も尙ほ  
されてゐるのは其の犠牲的精神に  
共鳴が然らしむるのであらふ。

寺小 屋  
竹田出雲の作「寺小屋」は  
總ての淨瑠璃中の最大傑作  
で、これ程力強い劇は數へ  
る程しかありません。かの  
「忠臣藏」と寺小屋とは外  
國の名優が西洋の舞臺で實  
演してゐる位です。武士道  
の極致、日本國民性の結晶  
と云つても過言ではありま  
すま。



## 義太夫名曲全集

四冊一組  
全二十五回

本全集の特色たる解説本は淨瑠璃を知らぬ人も面白  
く讀める我國初めての試み。

申込規定 全二十五組(百冊)四冊函入一組豫約會員にのみ頒つ  
です。○豫約金は要りません(一時拂)か(毎月拂)かを御申込書に  
記入の上會費だけお拂込み下されば宜しいのです。○會費は毎月拂一  
組四冊に付金壹圓、一時拂金貳拾貳圓◎送料(毎月拂)市内六錢、内  
地十二錢、朝鮮、臺灣、樺太、滿洲十四錢、外國は貳拾四錢◎(一時拂)  
市内壹圓五拾錢内地參圓、朝鮮、臺灣、樺太、滿洲金參圓五拾錢、外  
國六圓【注意】一時拂は發行所直接に限る



# 浪六全集

全四十五卷

浪六全集は贈玉全集である！ 贈玉の豪い人なら氣も豪い、望みも豪い、この豪い個性はやがて豪い家庭を作り、豪い社会を作り、豪い國家を作る。

申込規定 全部四十五巻豫約會員にのみ頒つてです。◎新型四六判總布製金文字入四百頁より七百頁 ◎先づ御入會の際申込金壹圓也御拂込み下さい、これは最終の巻の會費にあてますから最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。申込金は中途解約の方へは返戻いたしません ◎會費 毎月拂一冊に付金壹圓、全卷(四十五冊分) 一時拂金參拾八圓也一時拂は申込金を要せず ◎送料 會費の外は一錢も要りません

## 稲田一作

は明治四十二年四月より國民新聞紙上に掲載された當時から評判の高かつた讀み物で、多數の會員から其の刊行を幾度となく催促されたのでその御希望によりまして其の配本を繰上げました。が、斯様に多數の讀者から期待されて居る稲田一作とは抑々いかなる人物でありませうか。かの黒田健次以下「當世五人男」の中に出て来るやうな

一風變つた人物でせうか。イヤ、それとは趣きを異にした一個の快人物であります。が、例に依つて放膽な、常軌を逸した當世の豪傑であることは間違ひありません。が、表面は不真面目でも芯は極く真面目な男で、その豪い肝玉と才智とを何ういふ風に働かせるか。先づその一頁を覗いて御覽なさい。

# 稲田一作

第九十回 配本 五月上旬

浪六全集 第二十四卷

## 新刊 原田甲斐

史上に謎の人物も澤山あるが、近世實録中の大物は先づ原田甲斐に指を屈せねばなるまい。その背景には時の内閣をも揺り動かした政黨關係があるのだ。その眞相は此の一篇が如實に物語つてゐる。凄絶、壯絶、人の心膽を寒からしむるものである。

原田甲斐 特賣

定價金 貳圓  
五萬部限り  
特價金壹圓參拾錢

本書一たび世に出るや注文殺到の勢です。から品切にならぬ内にお申込を願ひます。

## 配本の順序

第十九回配本は「鬼あより特に第二十四卷」以下左の如く配本の願ひます。右は多數會六先生の傑作中の傑作ひます。

- 自第十九回 配本 順
- 第二十一回 罵倒
- 第二十三回 天眼
- 第二十五回 海

## おはん長右衛門の實説

京都虎石町帶屋長右衛門との情死の事實は、淨瑠璃演りますのとは些か異ふやうです。長右衛門とおはんは密通して、おはんは懷妊しました。つになるまで丹波の親類へ預ひまして、長右衛門はおはん目を忍びまして夜更に京都をといふ所へ參らふとする途中ひまして、路用の金をそつくと、哀れや二人とも締殺されました。

賊は其の罪跡を晦まさん。が桂川へ投込みまして、情死うに見せかけましたので、世情死をしたものと思ひ込んで、後其の賊が捕まりまなりました處から事實が判り

豫約 募集 浪六全集

第十八回分として配本された  
男女の戦ひ

共は一つの活きた教訓を受けてゐるやうな氣持になります。そこには階級闘争と云つたやうな現代の社會問題が叫び上手の談しを聴くやうな面白小説になつて居ります。いや小説體論文と云つた方が宜しいかも知れません。皮肉で滑稽で、眞實腹の底から溢み出るやうな ユウモア小説であります。

作

第九十回  
本配  
旬上月五

變つた人物でせうか。イヤ、それさきを異にした一個の快人物であり例に依つて放膽な、常軌を逸したの豪傑であることは間違ひありません。表面は不真面目でも芯は極く眞男で、その豪い肝玉と才智とを何風に働かせるか。先づその一頁を御覽なす。

よ世に出るや注文殺到の勢ですから品切内にお申込を願ひます。

定價金 貳圓

五萬部限り

特價金壹圓參拾錢

配本の順序 一部に就て變更に就て

第十九回配本は『鬼あざみ』第十八卷の順番に當りますが、今回より特に第二十四卷『稻田一作』を繰上げて第十九回配本と致し以下左の如く配本の順序を變更いたしますから不惡御了解願ひます。右は多數會員の御希望に依りましたので、何れも浪六先生の傑作中の傑作でございませうから相變らず御愛讀を願ひます。

- 自第十九回 稲田一作 前編
- 第二十一回 罵倒録 後編
- 第二十三回 天眼通 後編
- 第二十五回 海賊 後編
- 第二十回 稲田一作 續編
- 第二十二回 天眼通 前編
- 第二十四回 川徳

おはん長右衛門の實説

京都虎石町帯屋長右衛門と信濃屋おはんとの情死の事實は、淨瑠璃や歌舞伎で演りますのとは些か異ふやうに思はれます。長右衛門とおはんは密通をしまして、おはんは懷妊しました處から、身二つになるまで丹波の親類へ預けようと思ひまして、長右衛門はおはんを連れ、人目を忍びまして夜更に京都を立ち、榎原といふ所へ參らふとする途中で賊に出合ひまして、路用の金をそっくり取られた上に、哀れや二人とも締殺されてしまひました。

ど、賊に殺されたと云ふよりは情死の方が遙か面白味が有ります處から、矢張情死をしたと云ふ事にして歌舞伎淨瑠璃に仕組んだのでございませう。初めておはん長右衛門の狂言が舞臺に出ましたのは安永元年であつたかと思ひます。同五年堀江の豊竹此吉座で「桂川連理柵」といふ外題で淨瑠璃を出したのでございませう。作者は菅專助でありませう。また一説には、二人がお半の乳母を使つて、暫く身を寄せようと爲ましたのを乳母に慾心が起り、その悴と謀つて二人を絞殺し、金錢衣類を奪ひ、死骸を桂川へ投込んで、情死をしたやうに見せかけたと云ふことですが、確かな事は能く分りませぬ。この淨瑠璃は上下の二卷に分れましておはんは十四の小娘、長右衛門は三十八の分別盛りで、その對照が面白く出來て居ります。

國民必讀の書

# 日本精史

前編 後編

事實は小説よりも面白いと云はれて居ります。殊に我り源平時代、南北朝時代、戦國時代を経て幕末維新に歴史は實に花よりも美しく、一大繪巻物でありました。芳を撰んで綴り上げた織物こそ此の「日本精史」のごぞ文、剛壯の材特に新春の讀み物として是非一本をお勸

立身出世は能筆  
能文より始まる

## 書翰寶典

全四冊

西協吳石先生書  
實用ペン字書翰文

壹冊

玉木愛石先生書  
毛筆書翰文

壹冊

候文と口語體  
三體葉書文六百選

壹冊

候文と口語體  
三體模範書翰文

壹冊

豫約特價 四冊 金壹圓八十錢

(送料) 市内六錢、内地十八錢

◆朝鮮、臺灣、樺太、滿洲廿四錢

書道鼓吹に努めてゐる弊堂にては前に「書道寶鑑」を刊行して豫想外の好評を博しました。尚ほ此上にも向上進歩を計りまして以上四種の書を組合せまして實に破天荒格安のお値段で頒布する事になりました。が筆者は何れも斯界の双壁でありますから其の一つだけでも世に誇るに足るものと信じます。

實用ペン字書翰文は行草二體を聯ねて朱と墨とで印刷して字引を兼ねた斬新奇抜な編纂法で毛筆書翰文は葉書大の紙にくづした文字にて作例を認め三體葉書文六百選と三體模範書翰文は日常生活の上に必要な手紙文を候文、口語、美文の三體に分つて集大成したもので坐右の袖珍として推賞するに値するものであります。

右書翰寶典の新案になる総合的練習法によれば書翰文の認め方(口語、候文、美文、行書の筆使ひや作文は苦もなく出来、能筆能文になれる、殊に活字組で假名を振つた別冊で照り合すのが本書の特色であります。

### 熊澤蕃山の手紙

熊澤蕃山は中江藤樹の門人で、池田侯に仕へ、三千石を賜り國政にまで與かりました。此人の學問は總て實際的でありました。こゝに掲げました手紙なども人間修養の參考にならふと思ひます。これは門下生に與へた手紙です。

愚拙、十六七許りの時己にふとりなんとせしに、他人のふとりて進退自由ならざるを見て存候は、斯く身重くては武士の達者は成り難からん、如何にもしてふとらぬやうにと思ひ立ち、それより帶を解きて寝ねず、美味を食せず、酒を飲まず、男女の人道を絶つこと十年なりき。江戸詰にて山野の勤めならぬ所にては、鎗を使ひ、木刀を習ひ、とのゐの所にも寢葛籠の中に木刀の草履を入れ、人靜まつたる後に廣庭の人氣なき所に出で、闇に獨り兵法を遣ひ、大事の時にも見苦しからじと、人遠き屋の上を驅けり候得ば稀に見付けたる者は天狗やいざなはんと申たるげに候、是は二十より内の事にて餘りに過ぎたるに候、其以後も鷹を捕たねば、夏の暑氣にも日中に鐵砲を持ち

### 豫約募集

どんな惡筆のお方でも本書圖解式書法で習へば毛筆問はず短時日で上達な

國立書方手本 筆者 東京府青山師範學校前教諭 東京府第二高等女學校屬託 西協吳石先生編書

### 書道寶

全五冊 眞行草三體書法及書式 假名書法及書式 實用書翰文 漢詩及書翰文字 草書のくづし方

特價 一圓八十

(送料) 市内六錢 ◆内地十二錢 ◆朝鮮、臺灣、樺太、滿洲廿

如く勉め候 故に終にふとり申拙者事無分別不才覺にて、國家つべきものにあらざる事を我な存候 故に、責めて日本の武士とも可仕 存候て、家職許及ぶ限り仕 候ひき。身を軽く段は今に存じたる者多く可有

事實は小説よりも面白いと云はれて居ります。殊に我が平安朝の末より源平時代、南北朝時代、戦國時代を経て幕末維新に至る千有餘年の歴史は實に花よりも美くしい一大繪巻物でありました。その粹を抜き、芳を撰んで綴り上げた織物こそ此の『日本精史』でございます。流麗の文、剛壯の材特に新春の讀み物として是非一本をお勧め致します。

特價

前編一、五〇 (料送) 各十二錢  
後編一、五〇 (料送) 各十二錢

實典の新案になる総合的練習法に、書翰文の認め方(口語、候文、書書の筆使ひや作文は苦もなく出せる能文になれる、殊に活字組で假した別冊で照り合すのが本書の特長です。

澤蕃山の手紙

山は中江藤樹の門人で、池田侯に仕へ、祿を賜り國政にまで與かりましたが、此人の總て實際的でありました。こゝに掲げましたも人間修養の参考にならふと思ひまはれは門下生に與へた手紙です。

豫約募集

どんな悪筆の方でも本書の

圖解式書法で習へば毛筆ペン字を

問はず短時日で上達なさいます

國立書方手本 筆者  
東京府青山師範學校前教諭  
東京府第二高等女學校屬託  
西脇吳石先生編書

書道寶鑑

書法註解  
獨習自在

全五冊

眞行草三體書鑑 壹冊  
假名書法及書式 壹冊  
實用書翰文 壹冊  
漢詩及書翰文字引 壹冊  
草書のくづし方 壹冊

特價 一圓八十錢

(送料) 市内六錢 ◆内地十二錢

◆朝鮮、臺灣、樺太、滿洲廿四錢

六七許りの時己にふとりなんと他人のふとりて進退自由ならず存候は、斯く身重くては武士成り難からん、如何にもしてふらにと思ひ立ち、それより帯をねず、美味を食せず、酒を飲まぬ、人道を絶つこと十年なりき。山野の勤めならぬ所にては、木刀を習ひ、とのゐの所にも中に木刀の草履を入れ、人静まに廣庭の人氣なき所に出で、闇法を遣ひ、大事の時にも見苦し人遠き屋の上を驅けり候得ばけたる者は天狗やいざなはんと候、是は二十より内の事にてきたるにて候。其以後も鷹を持ち夏の暑氣にも日中に鐵砲を持ち

野に出で、雲雀を撃ち、霜月極月の雪霜を分けて山中に入り候得共、夜衣蒲團持たせたることなし、薄綿の肌衣の上に木綿袴重ねたる許りにて、袂箱一つ持たせたるも、半は紙硯書物にて、小袖二つ入れたるまでにて、民の家のあばらなるに行掛りに泊り候ひき。其外の勤は精しく申すに及ばず候。三十七八歳まで斯くの

豫告

○薬用植物の用途に就て(精巧) 圖解  
○有毒植物と其注意(精巧) 圖解

やがて郊外散歩の好季節になりました、遠足に修學旅行に少年少女等を携へて野に山に薬用植物や有毒植物の實地踏査に一日を送るのは都會の人にも田舎の人にも此上ない愉快な、そして有益な事であります。兩書とも詳しい圖譜を附けて親切に説明をしてありますからドナタが御覽になつても直ぐ役に立ちます。

家庭醫學の教

附 薬用植物新知識 二冊一組

三六版總クロース美本▲千九百八十四頁▲特價三四三十錢(送料)市内六錢、内地十八錢  
人口食糧問題と共に保健衛生は國民の義務として重大性を帯びて來ました。此際『食道樂』と共に本書を座右にお伽へ下さい。

新刊 婦人の知識

増補改訂 三六版クロース上製脊金文字入千二百頁▲定價三四三十錢▲特製二圓四十錢……文章平易説明懇切、無二の家庭寶典です。

御家庭の婦人の心得てゐなければ成らない事は何でも有りますから至極輕便な『百科辭典』として好評を博してをります。

近刊 裁縫の奥儀全

どんな初心の方にも御家庭で覚えられるやうに編纂いたしました。それに従來の寸尺と新時代のメートル法とを一つ一つ並べて親切丁寧に手を取つて教へるやうに説明をしてありますからお母様や姉様の御參考にもなります。目下稿を急いで居ります。菊版圖入約五百頁。

村井 著  
弦齋

人道樂 全五卷

第一卷	食道樂	春の巻
第二卷	食道樂	秋の巻
第三卷	食道樂續篇	夏の巻
第四卷	食道樂續篇	冬の巻
第五卷	食道樂續々篇	◎食物に關する研究◎日用食品分析表◎食品價格表等

◎申込方法 申込金はいりません。一時拂(並製四圓七圓)か毎月拂並製一圓五十錢かを申込書に御記入の上會費だけ御拂込み下されば宜しいのです。  
◎會費 並製本一時拂四圓七十錢で毎月拂一圓づゝです。特製本一時拂七圓也で毎月拂壹圓五十錢宛です。

◎送料 一時拂は市内三十錢、市外六十錢、海外七十錢▲毎月拂は市内六錢、市外十二錢海外十四錢  
◎拂込方法 振替貯金口座(東京三二八番)を御使用下さるのが一番安全で御便利です、又は爲替で毎月五日迄に着金するやう御拂込み下さい。集金郵便や代金引換はお断りいたします。

病人の食物

凡そ各種の病人に食物程大切な事はありません。一方に醫者の藥を溶るほど飲んで、一方で食物の注意を怠れば、それが爲に癒るべき病も急に癒らず、場合に依ると藥の効目を打消して、一層病を重くする事もあります。病氣によつては

藥を飲まないでも食物療法ばかりでも癒る種類が澤山あります。如何なる病氣も食物の影響を蒙らないものはありません。さて次に掲げました料理は大概な病人に應用する事が出来ますから必ずお醫者に相談して、此の中の孰れが宜いかと云ふことをお尋ねなさい。

其一 重湯

今迄は大病人には必ず重湯を飲ませました。重湯も拵へ方次第で滋養分が違ひます。上等にすると白米一合を洗つて、水一升を加へて、弱火で氣長に一時間半以上煮なければなりません。出来上つたら水囊で漉して鹽を加へて病人に與へます。その濃さ加減は病人によつて斟酌しなければなりません。

第二 チキンブローの重湯

我邦の大病人はお米の重湯を食べますが、西洋ではチキンブローの重湯を用ゐますチキンブローとは三百目位の雞雞を骨共に細かく切つて、大匙二杯のお米と一緒に五合の水へ入れて、鹽を小匙一杯加へて弱火で三時間以上氣長に煮たものです。西洋人は風でも引くと直ぐ此のチキンブローを食べますが、大層身體が温まつて藥だと申します。大病人には此のチキンブローを漉して、その重湯だけ食べさせます、普通の重湯よりは味も良い様ですから病人には好かれませう。(つゞく)

食道樂 第五卷

●豫約

他見男 ヌウ

第六回

高い山から谷底見れば  
おへその宿に泊る

五月中配本

高い山から谷底見ればの記録である、著者の自叙傳を陳列したものである。大體次の内容を語るであらう●歡樂の日の●脊負投げ●借着の報●その日の出来事●婦人記者●公。

おへその宿に泊るの記

面白！何とも云へぬ面白さ妙、着想奇抜、どんなムヅカシ人でも、腹を抱へずには居らんあんまり家中で笑うものだから上に寝てゐた猫が吃驚して飛出ふ話だ。

他見男さんの筆は眞面目であ可笑味は自然である。

第五回

女學校出の花嫁さん  
君と寝ようか五千石  
とるか

(配本中)

豫約は締切りました處陸續として新入會の方が絶えませぬので此際特に御便宜を計りまして當分の問御申込を受附ること致しました。

覽天賜

忠孝 大和櫻 各四六版  
義節 大和錦 各三六二頁  
文武 大和錦 各三六二頁  
仁俠 大和錦 各三六二頁  
冊送料 市内一圓五〇錢  
内地十二錢

刊近

加除六法全書 三、九〇(送) 一八錢  
日用知識 三、六〇(送) 一四錢  
算術問題 一、五〇(送) 一〇錢  
現代用語辭典 一、〇〇(送) 六錢

申形會(二)橋金(一)金

ないでも食物療法ばかりでも  
 が澤山あります。如何なる病氣  
 の影響を蒙らないものはありませ  
 次に掲げました料理は大概な病  
 用する事が出来ますから必ずお醫  
 師して、此の中の孰れが宜いかと  
 をお尋ねなさい。

一 重湯  
 大病人には必ず重湯を飲ませま  
 湯も拵へ方次第で滋養分が違ひ  
 等にすると白米一合を洗つて、  
 加へて、弱火で氣長に一時間半  
 ければなりません。出来上つた  
 漉して鹽を加へて病人に與へま  
 濃さ加減は病人によつて斟酌し  
 なりませせん。

二 チキンブローの重湯  
 大病人はお米の重湯を食べます  
 ではチキンブローの重湯を用ゐ  
 ンブローとは三百目位の雞雞を  
 かく切つて、大匙二杯のお米と  
 合の水へ入れて、鹽を小匙一杯  
 い火で三時間以上氣長に煮たも  
 西洋人は風でも引くと直ぐ此の  
 ローを食へますが、大層身體が  
 薬だと申します。大病人には此  
 ブローを漉して、その重湯だけ  
 ます、普通の重湯よりは味も良  
 から病人には好かれませう。  
 (つゞく)

●豫約募集  
 他見男 ユウモア全集  
 第六回 高い山から谷底見れば  
 おへその宿に泊るの記  
 五月中配本  
 高い山から谷底見れば  
 の記録である、著者の自叙傳を個展的に  
 陳列したものである。大體次の目次が其  
 の内容を語るであらう ●歡樂の夜 ●嘘吐  
 きの日 ●脊負投げ ●借着の報ひ ●間一髪  
 ●その日の出来事 ●婦人記者 ●馬鹿の三  
 公。  
 おへその宿に泊るの記 面白い！  
 面白い！ 何とも云へぬ面白さ。筆致輕  
 妙、着想奇抜、どんなムツカシイ顔をし  
 た人でも、腹を抱へずには居られない。  
 あんまり家中で笑うものだから、炬燵の  
 上に寝てゐた猫が吃驚して飛出したとい  
 ふ話だ。  
 他見男さんの筆は眞面目である、その  
 可笑味は自然である。  
 第五回 女學校出の花嫁さん  
 君と寝ようか五千石  
 ところか  
 (配本中)

二階へ上ると妻が残務整理に餘念ない  
 而かも其の整理旁々残り物を召上つて被  
 居やる。己も手を出した。妻も亦慌て、  
 他の分を掴んだ。これでもお互は一步足  
 を外へ踏めば憚りながら紳士淑女でござ  
 る。  
 「ねえ貴方」「なんだ」  
 「今日は随分費ひましたよ」  
 「困つたなア——、氣の利かねえ連中だ  
 からなア」  
 「貯金に少々異状があつてよ」  
 「あ、」と思はず歎息すると、  
 「貴方、御安心なさい」「何故？」  
 「私お茶漬で済ませますわ」  
 「何事も前世の約束と諦めてくれ……ハ  
 テ月末拂は大丈夫か知ら？」  
 ——おなかの逆立ち——(第四回)

他見男、ユウモア全集 (二册) 全二十一回  
 (一組) 四十二卷  
 我が八千萬同胞よ、漫畫漫文の他見男さん大ユウモアを體し現代  
 式生活を脱して大宇宙を飛躍するのとなれ。  
 申込規定 全二十一組(四十二册)豫約會員にのみ頒つてす◎新  
 形四六判金文字入紙数平均一組七百頁内外。◎入會申込 先づ御入  
 會の際申込金壹圓御拂込み下さい、これは最終の巻の會費にあてま  
 すから最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます◎會費毎月拂一組  
 (二册)に付金壹圓(外送料市内は六錢、内地は十二錢、朝鮮、臺灣  
 樺太、滿洲は十四錢外國は二十四錢)全二十一組(四十二册)一時拂  
 金拾八圓也、外送料市内壹圓貳拾六錢内地貳圓五拾貳錢、朝鮮、臺  
 灣、樺太、滿洲は金貳圓九拾四錢外國は金五圓四拾錢一時拂は申込  
 金を要しません。注意一時拂は發行所直接に限る。

近刊  
 ●加除六法全集  
 ●日用知識の華書  
 ●算術問題の通解  
 ●現代用語辭典  
 特價 三、九〇 (送) 一八錢  
 特價 三、六〇 (送) 一四錢  
 特價 一、五〇 (送) 一〇錢  
 特價 一、〇〇 (送) 六錢  
 發行所 玉井清文堂  
 東京市神田區表神保町十番地  
 東京市神田區表神保町十番地  
 玉井清文堂  
 電話神田二二三三番  
 振替東京三二八番

かされたなら、必ずや其國の土臺は揺るがざるを得ないのである。古へより外敵によつて滅ぼされた國はないが、思想といふ無形の闖入者によつて覆へされた國は幾らもある一たび歴史を繕いて列國興亡の址を省みたなら思ひ半ばに過ぎるであらふ。

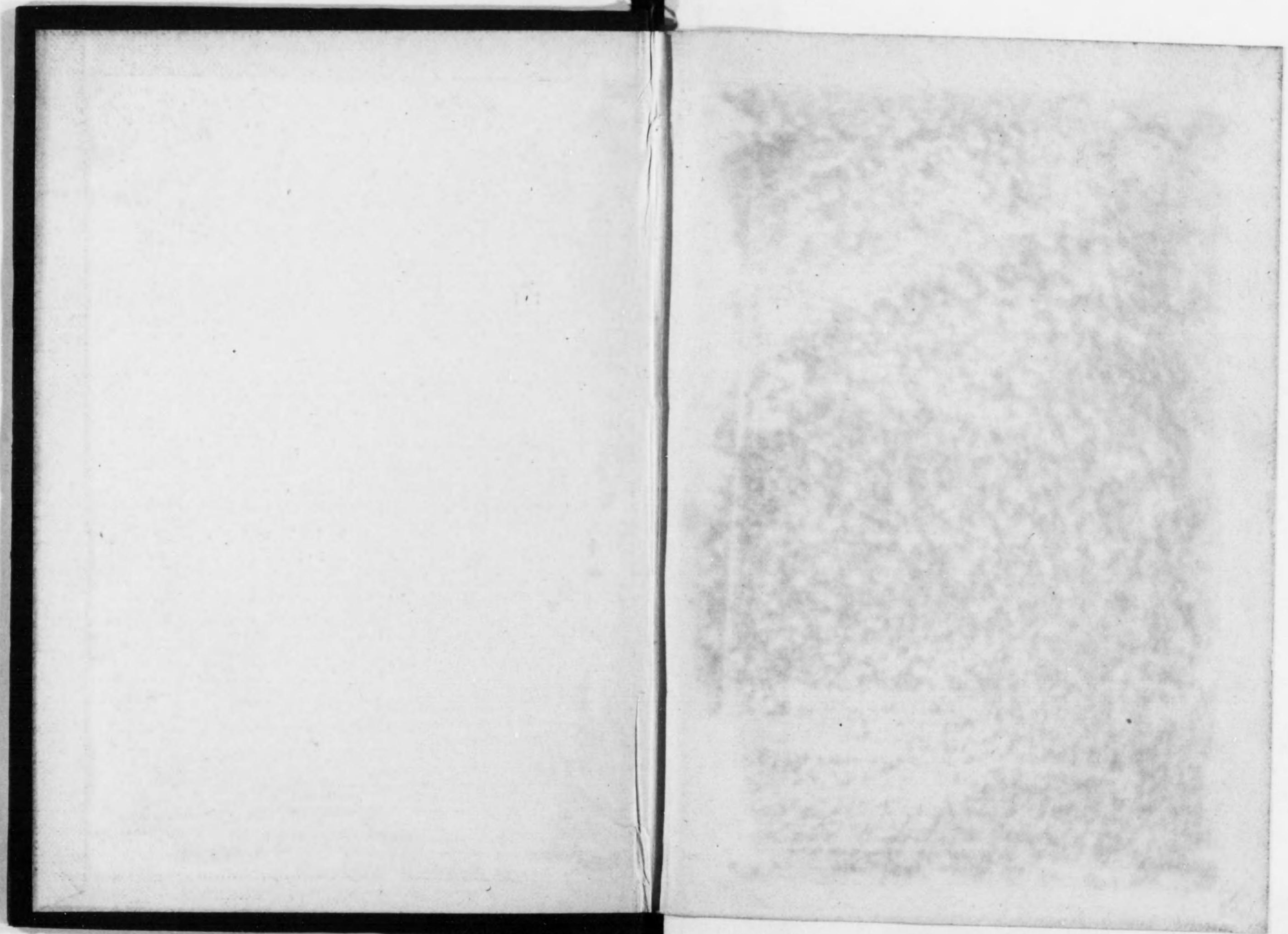
こゝに於て**思想國難**の聲を聴く。併しながら思想國難は今日に始まつた譯ではない。かの佛教渡來の如きは正に一大國難では無かつたか！ 然かもそれを咀嚼し更に消化せしめて能く日本固有の思想と融和せしめた所に我が個性の卓越せる所以を知る。近くはキリスト教ですらも漸く日本化しつゝ有るではない

ひとは何か。それは犠牲的精神の忘れられた事である。この犠牲的精神こそは日本人の持つ**唯一**

の力である。國家に對し、同胞に對しまた事業に對して献身的勇氣を失ひつ有ることが思想國難の中核である。

人類の美しさは犠牲的精神の外に何もない！ その美しい精神を掴み得た術の一つに我が義太夫淨瑠璃のあることを忘れては成らない。義太夫が今も尙持て囃されてゐるのは其の犠牲的精神對する共鳴が然らしむるのであらふ。







終